

---

# デジモントランスフォーマーズ

台風X号

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

デジモントランスフォーマーズ

### 【Zコード】

Z6470Z

### 【作者名】

台風X号

### 【あらすじ】

デジモンが変形し、トランスフォーマーは進化をする。

# 第一話 オールスパークが落ちてきた（前書き）

凄いコラボ誕生！

## 第一話 オールスパークが落ちてきた

数々の危機から何度も助かっているデジタルワールドだが、最大の異変がついに訪れてしまった。

デジタルワールドに宝石のような雨が降り始めた。

それは、オールスパークである。

オールスパークとは、触れた有機物なら何でもトランスフォーマーにする装置型宝石である。

デジモントランスフォーマーズ

現実世界では、流星大次は、とても暇そうな表情を見せていた。

「なんだか、今日は良いことが起こる予感がしないぜ。」

「おーい、大次。」

「げつ、山梨!」

山梨鬼束やまなしきづかと大次は、仲のいいコンビである。

「野球でもしようぜ。」

「いいね、俺も行くよ。」

大次が家を留守にした直後、机に何かが現れた。

その頃、デジタルワールドでは・・・・・

ギガドラモンとメガドラモンの頭にオールスパークが乗り、そして・  
・・・

「！」、これは・・・ウワアー！――

ギガドラモンとメガドラモンは身体が光りそして、2体の何かに変わった。

「！」の姿は、一体なんだ？」

「ギガドラモン様、その姿は一体？」

「お前もその姿なのか？」

彼等は、自らの名前を変えた。

「わしの名は、メガトロモンだ。」

「なら俺は、スタースクリームモンだぜ！」

共に完全体のデジモンであり、彼等は、仲間を探すべく、デジタルワールドのエリアの一部を破壊しながら、移動を始めた。

このことは、コンボモンと並びトジモンが知っていた。

「これは、大変だぜ！」

「コンボモンとマグナスモンは、ぶつかった。

「いたたた、おこつちやんと前見て歩けよー。」

「マグナスモン、あれを見てわからないのかー。」

マグナスモンは、愕然とした。

「何だよ、あれは・・・。」

ある場所では、テラー「コンデジモン」と戦っているサイバトロンがいた。

「行くぞ、ジエットモン。」

「おおっー。」

「デジモントランスフォーマーズ

「遂にはじまつたね、デジモントランスフォーマーズー。」

谷江利彦だにえりひこは、デジヴァイスにエネルギー「ネルゴンカード」を一枚差しこんだ。

「 evolution」

「ジエットモン進化、ジエットスカイモンー。」

テラーラー「コンデジモン」の中には、メガザラックモンがいた。

「テラー「コンデジモン」共、かかれ！」

「ジエットスカイモン、デジタルトランസフォームー乗つてくれ江利彦。」

「うん。」

「一気呵成に飛ばすゼーー・ジエットキャノンG.O.！」

時速200キロメートルのスピードで駆け抜けて、アクロバット飛行をした。

「降りてくれ、江利彦。」

「なかなか慣れにくいいな。」

「ジエットスカイモン、デジタルトランസフォームー！」

テラー・ゴンデジモンが一気に襲いかかってきた。

「俺のとつておきだーー・ジエットミサイルボンバーー！」

テラー・ゴンデジモンが全滅した。

メガザラックモンは何処かへと行ってしまった。

ジェットスカイモンは、ジェットモンに戻った。

「メガザラックモンに逃げられましたね。」

「でも、分かったよ。テストロンが攻めてくるならその危険性をす

でに把握していったほうがいいってね。」

「江利彦の言つとおりだよ。ハハハハハハハ

大次と鬼束は、自分の机に何かが乗っていることに気がついた。

「何だらう」  
「れは？」

次回予告

「デジタルワールドについて3人のメンバーが揃つた！」

「だけど、ここからがデストロンとの戦いになる。」

「デジタルワールドはトランسفォーマー型デジモン達の戦場と化すよ。」

「次回、デジモントランスフォーマーズ第一話勇者コンボグレイモン！」

「凄いことになりそうだねー！」

## 第一話 オールスパークが落ちてきた（後書き）

次回もまた見てね。

## 第一話 勇者コンボグレイモン！

大次と鬼束は、机にあるデジヴァイスを見た。

「何だらうこれは？」

その時、此の二人と一人をデジタルワールドへ誘い始めた。

デジモントランスフォーマーズ

OPテーマ 超えた光と暗黒の陣

走れ無限大の可能性を持つ戦士たちよトランスフォーマー  
息が合わないなんて言わないでほしい  
自らの心を正義色に染めて

立ち上がるうぜ

Go fight 進化の道を  
Go dash 音速超えて  
戦えー

トランスフォーマー邪悪な野望を打ち碎いて  
さあ究極の進化を導いて  
トランスフォーマー未来の種を植えて立ち上がれ！  
何処までも続く世界を  
守り抜け！

「何だここは？」

「大次、この場所なんか変じやないか？」

「確かに。」

「貴方達もこの場所に来たの?」

「君は誰だい?」

「私は、放生左利。君たちこの名前言つたら?」

「俺は、流星大次。」「俺は、山梨鬼束だ。」

「君達も、この謎の道具を持っているの?」

「そうだけど?」

その時、ジエット機が3人のいる近くに止まつた。

「君達は、そのデジヴァイスを持つていることは、近くにサイバトロンがいることだな。」

「誰だ、お前は!」

「僕は、谷江利彦。」

「そして、デジタルトランスフォーム・ジエットモン! それに此処はデジタルワールドだぜ!」

次々と、軽トラやバイクが現れた。

「デジタルトランスフォーム! コンボモン!」

「デジタルトランスフォーム・マグナスモン！」

「デジタルトランスフォーム！バスターモン！」

三体のデジモンは、三人の少年少女と行動とりたいと宣言した。

「いいぜー。これから俺たちはサイバトロン戦士だ！」

「デジモントランスフォーマーズ、かなり面白いぜー。」

「メガトロモンだ！よろしくデジモントランスフォーマーズ。」

メガザラックモンは、メガトロモンに体罰を受けていた。

「愚か者が、テラー・コンデジモンを全滅させられるとは生意氣にもほどがあるわ！」

「しかし、彼の力を見くびつた私にせきにんがあるといつのですか？」

「そうだ！」

メガザラックモンの代わりに、スノーストームモンが行くことにした。

「おい、テラー・コンデジモン共、サイバトロンの奴ら増えているがぶつ飛ばせ！」

ジェットモンは、叫んだ。

「早く逃げるー！」

みんなは、テラー「コンデジモン」に囮まれてしまった。

流星大次は、土をエネルゴンに変えた。

「行くよ、コンボモン。」

「此処は行くしかないよ、うだ！」

流星大次は、エネルゴンカード一枚を「デジヴァイス」に差し込んだ。

「 evolution」

「コンボモン進化、コンボグレイモンー！」

スノーストームモンは、コンボグレイモンに向かって攻撃をした。

「喰らえエナジー・ソーミサイル！」

コンボグレイモンは、軽やかに避けた。

「何、避けただとー！」

「ハマンダーフレイムー！」

「ぎゅーーー！」

スノーストームモンは吹き飛ばされてしまった。

「テラーハンパジモンは、またしても全滅した。

「凄いゼコンボモン！」

「えつ、セツカ？」

「セツだよー」

メガトロモンは、スノーストームモンにあることを言った。

「お前も、そんなことでやられたなら、次はショックウェーブモン  
お前が行け！」

「了解しました。メガトロモン様！」

EDテーマ　まっすぐに行け！

もういい心はいつも泣いている  
自分の弱さを強さに変えるまで  
たとえ命朽ち様ともと決意したけど  
まっすぐに行きたいただそれだけで  
自らが強くなれる気がする  
雲を見て誰がどう思うの？

楽しさと悲しみのある世界だから  
もっと強くなろう！ランスフォーマー  
悪をぶち破れ！ランスフォーマー

次回予告

「マグナスモン進化よ。」

「よつしや、此の俺が遂に進化するぜー。」

「バスターモンの出番はもう少し後になるな。」

「やう言われていいやー。」

「鬼束、蹴らないでくれよ。」

「次回、デジモントランスマーブ第三話最高だぜ、ウルティマスモン。」

「凄いことになりそうだー。」

## 第一話 勇者コンボグレイモン！（後書き）

次回もまた見てね。

## 第三話 最高だぜ、ウルティマスモン！

「デジタルワールド」に来てから、4日目となつた。

流星大次は、傷だらけの「デジモン」を見つけた。

「あんなところに傷だらけの「デジモン」がいるよ。」

大次は、みんなに知らせた。

コンボモンは、見覚えがあった。

「君は、ライトモンだね？」

「コンボモンか。」

どうやら、サイバトロンのエンプレムがあつた。

「ショックウェーブモンに隙を突かれやられた。」

コンボモンはびっくりした表情でライトモンを覗ついていた。

ショックウェーブモン完全体必殺技「グレートバレルリー」

ライトモンは、あちこちに散らばった仲間を4体見つけたいと書いて、サイバトロンと一緒に同行を開始した。

それを恐竜型のテラーコンデジモンが見ていた。

メガザラックモンとアイアンとレッドモンは、スタースクリームモンの行動を監視していた。

「メガトロモン様の言つことより俺のやり方のほうがいいんだ。」

カブトムシ型のテラー「コンデジモンを何処かに送り込んでいた。

「あいつ、デジタルワールドの港の方に送り込んだぞ！」

「ヤバいぞ！ あそこには、サイバトロンの一人がいるんだぞ！』

デジモントランスフォーマーズ

デジモントランスマントラニスフオーマーズ

大次達は、ショックウェーブモンと対面になっていた。

「お前等、サイバトロン共に要はない。グレートバレルリーフ！」

サイバトロンは避けた。

左利の手にエネルゴンカードがあつた。

「マグナスモン行くよ。」

「よしつー。」

「evolution」

「マグナスモン進化、ウルティマスモン！」

ウルティマスモンは、自分の姿を見た。

「すげえー、俺も良い姿になつたぜ！」

「所詮、成熟期の状態だ。バレルデスピートー！」

ウルティマスモンはうまく避けた。

「喰らえ、ウルトラモンストーン！」

ショックウェーブモンは、素早いスピードでよけてしまった。

「なにつー！」

次回予告

「これはいきなりピンチだ。」

「此処は、ジエットモンとコンボモンとウルティマスモンのチームワークだぜ！」

「僕を忘れていませんか？」

「バスターモンいたのか・・・」

「次回、デジモントランスフォーマーズ第四話集結成熟期サイバトロン。」

「凄いことになりそうだ！」

第三話 最高だぜ、ウルティマスモン！（後書き）

次回もまた見てね

## 第四話 集結—成熟期サイバトロン

「なに?...」

ショックウェーブモンは、軽々とよけた。

「あの巨体で避けるとは。いやらしい奴だな。」

怒りながらコンボモンは走り回った。

「ダンプオール!//サイル!」

ショックウェーブモンの攻撃は、サイバトロン全員を吹き飛ばした。

「へー、あいつ強すぎやしない。」

「ショックウェーブモン、デジタルトランスフォーム!」

ショックウェーブモンは、戦艦に変形した。

「コンボモン、ひつなつたら進化だ。」

「よし、やつへやるよ。」

「エヴォリューション!」

「コンボモン進化、コンボグレイモン!」

「行くぞ、マンダーフレイム!」

ショックウーブモンは、またしても避けてしまった。

「いやつ、 素早すぎる。」

江利彦は言った。

「ジヒットモン、お前も進化して奴を止めるー！」

「解ー。」

「エボリューション

「ジヒットモン進化、ジヒットスカイモンー！」

「ハイスピードレーザーー！」

「避けろー。」

しかし、ショックウーブモンは避けた。

「わかつたぞ。ショックウーブモンに命令している奴が、あそこ  
にいるー。」

大次は、草村の中にデジモンがいることをみんなに知らせた。

「あんなどこにいたのか。」

「どうりで、変な動きをしていたんだな。」

イジエクタモン成熟期必殺技「マイクロ破

「そのデジモンは、俺に任せろー鬼束頼むぜー」

「分かつたぜバスターモン！」

「EVOLUTIION」

「バスターモン進化、ランドマインモン！」

「覚悟しろー！ ブラスタークエイク！」

イジエクタモンは、よけようとしたが揺れが原因で身動きが取れなかつた。

ショックウェーブモンは、ランドマインモンを撃とうとしていた。

「させらか、ソニッキスピーク//サイル！」

ジェットスカイモンの攻撃に翻弄されてくるショックウェーブモンは、隙だらけになっていた。

「ウルティマスモン！」

「よし、ウルトラモンsteen！」

ショックウェーブモンはよけきれずに攻撃を受けて吹き飛ばされてしまつた。

残すは、イジエクタモンのみである。

「ジ・ナルバースト！」

「マイネットショート！」

イジエクタモンに向かつて、二つの攻撃が襲つた。

「うぎゃーーーー！」

イジエクタモンは、悲鳴をあげて消滅した。

デジデストロン戦士を一体倒したことでデジタルワールドを救うことができるカギを手に入れた。

「」の鍵は、何かに使えるのかな？」

「一応、とつてお」「ばー

一方、デジテストロンでは

メガトロモンがショックウーブモンに制裁を加えていた。

次回予告

「スター・スクリームモンって誰？」

「よくわからないけど、とんでもない奴だよ。」

「不思議な奴なんだけど、僕たちの敵だ。」

「次回、『デジモントランスマフォーマーズ第五話 小さい島に』

「やるこ」になりそつだ。」

第四話 集結－成熟期サイバトロン（後書き）

次回もまた見てね！

## 第五話 小わこ島に（前編）

小わこ島にあつたジサイバトロンの伝説。

## 第五話 小さい島に

前回までのあらすじ

ショックウェーブモンに苦戦を強いられていたデジサイバトロンの者たち。

しかし、からくりを見つけることで形勢が逆転。

ショックウェーブモンは、吹き飛ばされて、からくりの原因を作ったイジエクタモンを見事に倒したのであった。

大次は、コンボモンの変形した軽トラの荷物乗せの台の上に乗った。

「大次、なんでそこに座るの？」

「此処に乗ったほうが空気がたっぷり吸えるから。」

「フライトモン、本当にこの方向で正しいの？」

左利が聞いた。

「此処で正しい。僕はここを通った時にショックウェーブモンに襲われたから。」

鬼束は、何かを気にしていた。

「デジテストロンの一人がこの先を守っているのには、何か理由があるに違いない。」

バスター・モンが、ボケかませに言った。

「小さい島は、デジテストロンの基地しまだつたりしてな。痛つ！ 蹴るなよ鬼束！」

「お前が、変なダジャレを言つからだよ。バスター・モン。」

「君たちは、そういう下らないことに喧嘩してんじゃないのよー。」

左利は、鬼束とバスター・モンに言った。

「よし、着いたぞ。」

フライトモンは、そう言った。

大次は、その島に行く橋を見つけた。

「あそこから、行こ。」

スタースクリームモンとスクラップメタルモンとマイクロモンズとフレンジーモンは、デジサイバトロン達の後を追いかけていた。

「やばいぜ、スタースクリームモンの田那。デジサイバトロンの奴らが俺達の拘束しているデジモン達が狙われる。どうしますか？」

スクラップメタルモン 完全体 必殺技「ミードン・クラッシュ」

マイクロモンズ 成長期 リードマンモン 完全体 必殺技「ミクロデスカッター」

フレンジーモン 成熟期 必殺技「アースクエイクフェスティバル」

デジサイバトロン達は、拘束されているデジモン達の特徴性を見た。

「此処にいるデジモン達、全員、成長期じゃないか。」

「ああ、ひどい事しかがるぜ。デジタルトランスマフォーム一コンボモン。」

デジサイバトロン達は、頭上を見上げた。

「まことに、デジテストロンだ！」

「しかも、厄介な数ほどいる。」

スタースクリームモンは、にせりとしながらビーム砲を向けた。

「ナルビームヘル！」

成長期のデジモン達が、襲われた。

「こいつ、卑怯だぞ。」

「アースクエイクフェスティバル！」

地震により、デジサイバトロン達は、身動きが取れなかつた。

「ジョットモン行くぞー。」

「おー江利彦ー！」

「EVOLTHON」

「ジヒットモン進化、ジヒットスカイモン！」

「クロードウインドー！」

フレンジーモンは、吹き飛ばされて湖に落ちた。

「今のうちに、行くぞバスターモン。」「よつしゅ 自分の出番到来。

」

「EVOLTHON」

「バスターモン進化、ランドマイモンー！」

「トワライトバーストー！」

スクラップメタルモンに命中したが、完全体とこいつともあるのかあまり効かなかつた。

「痒いぞその攻撃。ミードン・クラッシュヤーー！」

空気を吸い込んで放つ、攻撃はデジサイバtron達を島から追い出した。

「くつ、コンボモン。」「大次、分かつたぜー！」

「EVOLTHON」

「コンボモン進化、コンボグレイモンー。」

「ハマンダーフレイムー。」

マイクロモンズにコマンダーフレイムが命中した。

次回予告

「ついに、ついに来るがー。」

「何がだよ。コンボモン。」

「バスターモンには、分からぬことだよ。」

「何だと、自分にも気になる事を。」

「言いたいけど、次回わかるよ。」

「次回、デジモントランスフォーマーズ第六話リンクアップ進化発動！コンボグレイモンファイトモードー。」

「す、ことになりそうだ。」

第五話 小さい島に（後書き）

次回もまた見てね！

## 第六話 リンクアップ進化発動－コンボグレイモンファイトモード－（前書き）

合体進化が発動！テジテストロンの脅威となるのか？

## 第六話 リンクアップ進化発動！コンボグレイモンフライトモード！

マイクロモンズにコマンダー・フレイムが命中した。

「やった。命中したぞ！」

左利が、指をさした。

「あの状況で、進化している。」

「これは、進化ではない。合体だ！」

リードマンモン 完全体 必殺技「ミクロデスマッターパルス」

「食らえ、ミクロデスマッター！」

コンボグレイモン達は、大次達に言った。

「俺達の中にいれば安心だ。デジタルトランスフォーム！」

大次達は、コンボグレイモン達の中に入った。

ミクロデスマッターが襲いかかってきた。

「これのどこが、安全なのよー！」

音がすごいので、左利にとつて怖い経験になった。

地面に着地したデジサイバトロンは、反撃の準備を整えた。

「行くぜー。」

「おひー。コマンダーフレイムー。」

リードマンモンは、コマンダーフレイムをよけた。

コマンダーフレイムは、フレンジーモンに当たった。

「なんで、俺になるんだーー！」

そつ言いながら、フレンジーモンは消滅した。

フライトモンは、大次に言った。

「俺とコンボグレイモンをリンクアップさせてくれーー。」

デジヴァイスが輝いていた。

「LINK UP EVERGREEN」

「コンボグレイモンー。」「フライトモンー。」「リンクアップー。コンボグレイモンフライトモードー。」

「お前も合体できると、たいしたできそこなこのデジサイバトロンだな。」「

リードマンモンは、挑発していた。

「まつ、一人」と遁してやる。//クロテスカッター！

コンボグレイモンフライモードは、物凄い速さで//クロアスカッターを避けまくった。

「なにひーーーの俺の攻撃を避けるだとーマイクロサウザンドー。」

「この攻撃も素早く受けられてしまつた。」

「なんとこゝ速さなんだ。」

コンボグレイモンフライモードの早さは、スタースクリームモンも参戦するも飛ばされてしまつた。

「ハマンダーアクセル！」

音速並みの速度で、リードマンモンを翻弄させた。

「くつ、この俺が負ける。」

「終わりだ。トルネードジエネラル・フルスロットルー！」

リードマンモンは、そのエネルギー波をもう二度受けた。

「デジテストロンは、永遠に不滅だーー！」

リードマンモンは、その言葉を吐いた後、消滅した。

「コンクオフー。」

コンボグレイモンは、コンボモンに退化した。

ほかのデジサイバトロンも成長期に戻った。

フライトモンの力を田の辺たりにしたスタースクリームモンとスクラップメタルモンは、その場を立ち去った。

フライトモンだけは、成熟期だが、デジサイバトロンにとってなくてはならない存在となつた。

デジサイバトロン達は、もう一回島に入つた。

一方、デジテストロンでは・・・

「メガトロモン様、ビュンしますか。」

「スタースクリームモンも倒しぴらりい敵といつゝことせ、わしの出番かもな。」

次回予告

「地下の神殿に何かがある。」

「こんな暗闇じゃ見えないな。」

「デジサイバトロンが拘束されている。」

「次回、デジモントランスフォーマーズ第七話地上のスピード王マツハアラートモン」

「すう」とことになりそうだ。」

## 第六話 リンクアップ進化発動－コンボグレイモンフライモード－（後書き）

次回もまた見てね！

## 第七話 地上のスピードマッチハーネットモン(前編)

神殿にも更に「デジサイバトロン」の存在があった。しかし、ハーネットモンの集団に・・・

## 第七話 地上のスピード王マッシュアラートモン

大次は、デジヴァイスが光り続けていることに疑問を思った。

「デジヴァイスが光っていることは、もしかして。」

「デジサイバトロンの仲間がいることになる。」

コンボモンとマグナスモンとバスターモンとライトモンは喜んでいた。

「新しい仲間が増えたって嬉しい。」

「嬉しくて、お祭り騒ぎになるぜー。」

鬼束は、不吉な予感をしたのでそのことを話した。

「お祭り騒ぎになるのはいいが、重要なことを忘れてないか。」

「何だよ、鬼束。お祭りムードを壊さないでよ。」

「罷だと考えて置かないとましいかもしだれないので。デジテス特朗が此処を支配していたということは、此処には、残党が残っている可能性があるというわけだよ。」

大次と左利と江利彦は、確かにと思つた。

デジサイバトロン一行は、フライトモン達を先頭に神殿の中に入つて行つた。

「神殿の中って結構、寒いわね。」

左利は言った。

マグナスマンは、何かを見つけた。

「あそこへ、囚われているデジモンがいる。」

テラー・コン・デジモンの集団が、『デジサイバトロン』の周りを囲んでいた。

「かなりの警備だ。どうするの?..」

デジテストロンの一員がいた。

大次は、データを見た。

「マッハアラートモン。完全体。必殺技は、フィールドキリイング  
ハリケーン。」

「そんなに強いのに、何で捕まっているんだよ。」

テラー・コン・デジモン集団は、ある者の名前を呼んだ。

「警備は、順調であります。メガトロモン様。」

「メガトロモン・・貴様・・・」

「お前は、俺の手でデータ」と破壊してやる。」

「やめろーー！」

大次達は、メガトロモンの恐怖を知らない。

「デジサイバトロン、進化だ。」

「よつしゃーー！」

「EVO-THON」

「コンボモン進化、コンボグレイモンー！」

「マグナスモン進化、ウルティマスモンー！」

「ジェットモン進化、ジェットスカイモンー！」

「バスターモン進化、ランドマインモンー！」

メガトロモンは、笑っていた。

「何がおかしい。」

「雑魚が此の墓場に集うとはな。キルドソードー！」

コンボグレイモン達は、避けた。

「何だよかなり早いぞ。」

「フライトモン、コンボグレイモンとリンクアップだ。」

「分かつたよ！」

「LINK UP EVOLUTION」

「コンボグレイモン」「フライトモン」「リンクアップ！コンボグ  
レイモンフライトモード！」

メガトロモンは、コンボグレイモンフライトモードに気を取られて  
しまった。

「何だあの速さは。」

「行け！ウルティマスモン。」

「ウルトラモンスーン！」

「ぐわああああ」

メガトロモンは、神殿の外まで吹き飛ばされた。

「デジタルトランスフォーム！」

メガトロモンは、退却した。

「おのれ、よくもメガトロモン様に無礼な行動を許さん。」

「良いぜ。相手してやる。グレードアーススクエイク！」

地震で身動きを封じた。

「クローデウイニングー！」

ジエットスカイモンがテラー・コンテジモンの5分の1を削った。

「ウルトラハンドバーレル！」

殴りまくつてテラー・コンテジモンを削るウルティマスモン。

「トワイライトバースト！」

テラー・コンテジモンを一斉殲滅したラングマインモンは喜んでいた。

「す、いや自分。」

「トルネードジエネラル・フルスロットル！」

コンボグレイモンフライモードは、テラー・コンテジモンを全滅させた。

「リンクオフ！」

フライトモンは、マッハアラートモンの鎖を破壊した。

「ありがとう。フライトモン。」

「デジサイバトロンのみんなだよ。君を助けたのは。

「やうか、君達、デジサイバトロンなんだ。」

成長期に戻ったコンボモン達は、マッハアラートモンから衝撃の事実を知った。

「あの、メガトロモン。究極体のデジモンを何体も倒しているのー。」

「そりなんだ。完全体なんだが、究極体デジモンすら恐怖に慄くほど手ごわいといわれている。ただし、ロイヤルナイツや七大魔王はその力を見下しているらしい。しかし、デジテストロンの中に七大魔王の一人が過大評価しているらしい。」

#### 次回予告

「島から出て次の冒険を始めよ。」

「しばらくしたら、何かにぎやかな街があるよ。」

「しかし、そこにはデジテストロンが現れた。」

「この街を破壊させるわけには行かない。」

「次回、デジモントランスマーズ第八話音波野郎と破壊光線野郎、サウンドウェーブモン&レーザーウェーブモンを止めろ！」

「すごいことになりそうだ。」

## 第七話 地上のスペード王マジハーツモン（後編）

次回もまた見てね！

「風×弓」の「テジモンシリーズ第一弾が満を持して登場？」

詳しく述べ、3月23日の特別小説を確認。

## 第八話 音波野郎と破壊光線野郎、サウンドウェーブモンとレーザーウェーブモ

テジテストロンの二人が動き始める。

## 第八話 音波野郎と破壊光線野郎、サウンドウーハーフモンとレーザーウーハーフモン

「デジサイバトロンは、島から出た。」

「マッハアラートモンが、連れ去られたとき、どこにいたの？」

大次が、マッハアラートモンに聞いかけた。

「そうだな、綺麗好きのデジモン達が集まる街でデジデストロロンにて不意を突かれて、気がついたら島にいたな。」

マッハアラートモンは、変形して、4WDに変形した。

「コンボモン達も変形してその街を行こうよ。」

「おおー。」

コンボモン達は、綺麗好きのデジモン達の集まる街に向ってきました。

「本当にきれいな街だ。」

「本当だわ。綺麗ね。」

「残念ながら、この街は、デジテストロンに汚されてしましました。」

大次達は、マリンエンジンモンを見ていた。

「この街は、マリンの付べデジモン達がきれいにしないといけない

撃があるのです。しかし、デジテストロンが私達の仲間をほとんど殺してしまったせいで、わずか30体しか残っていません。」

江利彦は、怒った。

「ひどいことをしゃがる。デジテストロンは、成長期のデジモン達にも容赦がなかつた。しかも此のきれいな街にまで襲うとは、卑劣かつ最低な集団だな許せない！」

「江利彦、俺も許せないぜ！デジタルワールドからデジテストロンを追い出してやる！」

「どうか、お願いします。デジサイバトロンの皆様方、我々の町を救つていください。」

マリンテビモンの依頼をデジサイバトロンは了解した瞬間・・・

「キリイングレーザー！」

依頼をしていたマリンテビモンが目の前で殺された。

レーザーウェーブモン 完全体 必殺技「キリイングレーザー」

サウンドウーブモン 完全体 必殺技「テラサウンド・ブリート」

大次と鬼束と左利と江利彦は、デジヴァイスにエネルギーカードを差し込んだ。

「EVOLTEON」

「コンボモン進化、コンボグレイモン！」「

「マグナスモン進化、ウルティマスモン！」「

「ジョットモン進化、ジョットスカイモン！」「

「バスターモン進化、ランドマインモン！」「

デジサイバトロンは、レーザーウェーブモン達に攻撃をした。

「ジユネラルカッター！」「

「ウルトラモンスター！」「

「スピードカッターサイクル！」「

「トワイライトバースト！」「

続いて、フライトモンとマッハアラートモンも攻撃した。

「フライスピード！」「

「プライドフルキャノン！」「

デジサイバトロン達は、やつたと思つた。

「残念でした。俺達は痛くもかゆくもありません。殺れ！サウンドウェーブモン！」「

「騒音悔羅廃」  
そうおん ひらすたー

マコンエンジンモンがデジサイバトロンをかばつた後、消滅した。

「LHNK UP EVOLUTION」

「ジヒットスカイモン!」 「マッハアラートモン!」 「リンクアップ!-ジヒットスカイモンマッハアラートモード!」

次回予告

「リンクアップしたぞ!」

「デジサイバトロンの中でも、地上の最速戦士になつたね。」

「デジテスロロンをぶつ飛ばそ!」

「次回、デジモントランスフォーマーズ第九話合体進化と完全体進化。」

「あーことになりそうだ!」

## 第八話 音波野郎と破壊光線野郎、サウンドウェーブモンとレーザーウェーブモ

次回もまた見てね！

第一弾降臨は4月予定。新たな伝説を叩きせよ！

## 第九話 合体進化と完全体進化（前書き）

デジデストロンの二人を倒すことができるのか？

## 第九話 合体進化と完全体進化

ジェットスカイモンとマッハアラートモンは、リンクアップした。

「行くぞ、ジェットスカイモンマッハアラートモード！」

「おう！」

レーザーホープモンとサウンドホープモンはデジサイバトロンの周りを軽快なステップで見下していた。

「俺の攻撃を食らえ！ 騒音悔羅廢！」

ジェットスカイモンマッハアラートモードは、瞬時に避けた。

「次は、じつちだ！ マッシュシャツフルカリケーン！」

サウンドウェーブモンは、吹き飛ばされた。

「あーれー、行け、ジャガーロマンドヘキサモンとコンドルコマンドヘキサモン。」

サウンドウェーブモンは、建物を破壊した後、「コンボグレイモンに近付いてきた。」

「ジョンナルーム！」

サウンドウェーブモンは、避けた。

左利に、コンドル「マンドヘキサモン」とジャガー「マンドヘキサモ  
ン」が近づいていた。

「来ないでよ。ウルティマスモン助けて。」

「任しどけ、マグナストーム！」

コンドルコマンドヘキサモン達を追い払つたウルティマスモン。

「ウルティマスモン、フレイトモンとランクアップアリ。

一分かつたせ!

- L H N K U P E V O T H O Z J

「ウルティマスモン」、「ライトモン」、「リンクアップ！ウルティマスモンライトモード」

ウルティマスマモンフライトモード、コンボグレイモンフライトモード同様、成熟期。完全体デジモンが50体来ても、余裕で戦いが繰り広げられる。必殺技は、ウルトラ・インパクト。

「私は、ジャガーコマンドへキサモンの2体を倒すわ。」

「音速で行くぜ！ウルトラ・インパクト！」

「ぐわあああ！」　「ほあああああああ！」

ジャガー ハマンデく キサモンと ハンデル ハマハデく キサモンは、 消滅した。

しかし、テラー・コンデジモン集団が現れた。

「なにっ！」

ブレークダウモンとバザードモンが参戦してきた。

ブレークダウモン 完全体 必殺技「ブレードスラッシュ」

バザードモン 完全体 必殺技「キリイング・ミュージック」

大次は、此の絶望的な状況に弱音を吐きそうになった。

「コンボグレイモン、進化できるか。」

「何だ急に。」

「デジヴァイスにもう一枚、エネルギー・カードを差し込む。」

大次は、テラー・コンデジモンの攻撃を避けて、更には、テラー・コンデジモンを踏み台にした。

「屋根の一部を切り取る。」

大次は、デジヴァイスに搭載されているレーザーで、屋根をカード状に切り取った。

「よしつ、コンボグレイモン行くよー。」

「ああ、やつてやるぜ大次！」

## 「POWER SET EVOLUTION」

「コンボグレイモン進化！ファイアーコンボモン！」

ファイアーコンボモン 完全体。コンボグレイモンが進化した姿。梯子から出るレーザー光線による必殺技「プライムテストロイヤー」は、悪を倒す。

レーザーウエーブモンとバザードモンとサウンドウェーブモンは、ファイアーコンボモンに襲いかかった。

「キリングレーザー！」

「ブレーデスマッシュ！」

「殺戮音波大衝撃！」

ファイアーコンボモンは、三つの技を梯子の部分で止めた。

「何だと、俺達の技を止めるとは。」

ブレークダウモンは、見物しに来ていただけである。

ファイアーコンボモンは、梯子にたまっているエネルギーをテラー・コンデジモンに受け流した。

「サンキュー、ファイアーコンボモン。」

「ああ」

バザードモンは、怒つてファイアーコンボモンに攻撃しかけた。

「ダークバードアタック！」

「プライムストロイヤー！」

バザードモンは、攻撃を受けて、消滅した。

レーザーワープモンとサウンドウェーブモンは、梯子を押された。

「ぐつ・・・」

「これなら攻撃できまい。」

「スピードフルキャノン！」

「ウルトラ・インパクト！」

「一体の攻撃が、レーザーワープモンとサウンドウェーブモンに命中した。

「あの二人を忘れていた。」

ラングマインモンは、残りのテラーコンデジモンを倒していく。

その時、ブレークダウモンを見た。

「何だあいつは。」

鬼束が言った。

「おー、よそ見をするなー。」

「すまん、トワライライトバースト！」

テラー・コン<sup>デジ</sup>モンが、やつと全滅した。

レーザー・ウェーブモンとサウンド・ウェーブモンは、ファイアーコンボモンに立ち向かおうとしていた。

「聖剣ライムフォース！」

梯子が剣に変形して、レーザー・ウェーブモン達を真つ一つにした。

「メガトロモン様、万歳ーー！」

レーザー・ウェーブモン達は消滅した。

3体の持つ、鍵が新たな<sup>デジ</sup>サイバトロンの位置を示していた。

「新しい、<sup>デジ</sup>サイバトロンを求めて、次の場所へ行こうーー。」

「ああ、そうこなくては。」

「デジタルトランスフォームー！」

<sup>デジ</sup>サイバトロンは、デジタルワールドの中でも、暑苦しい場所へ向かつた。

ブレークダウモンは、メガトロモンの命令で調査していたようだ。

「メガトロモン様。話の腰を折つてすみませんが・・・」

「何だ、ブレークダウモン。報告なら早く済ませてくれ。」

「デジサイバトロンの者達、どんどん強くなつております。どうしますか、このままでは、デジデストロンの死活問題になりかねません。」

「そうか、分かった。九大魔将軍の諸君、此の事で何か対策をとっているようだな。」

超神將軍オーバーロードモン 究極体。必殺技「オーバーメテオ」  
怪魚將軍キングポセイドモン 究極体。必殺技「ロストリミックス・キル」

野獸將軍ブレダキングモン 究極体。必殺技「破壊」という名の獣の囁き

技術將軍デバスタモン 究極体。必殺技「テクニックデリート」

情報將軍メナゾールモン 究極体。必殺技「無礼の刃乗」

火炎將軍レッドティカスモン 究極体。必殺技「マグマフォース・ダイレクト」

恐竜將軍ダイナザウラーモン 究極体。必殺技「ダイノフォリニア」

妖獸將軍オボミナスモン 究極体。必殺技「恐怖の幻転殺破」

暗黒將軍ブラックザラックモン 究極体。必殺技「ブラックワールド・ビックバン」

此の九代將軍は、七大魔王に匹敵する力を持つ。

メガトロモンと手を組んだ理由はわからない。

これは何かやばそうな気配がしてきた。

次回予告

「暑いよ～・・・

「水が飲みたい。」

「この場所はすでにある邪悪なデジモンによつて、支配されているせいでより暑くなっています。」

「新しいデジサイバトロンが教えてくれたと思つたら何だあれは!」

「次回、デジモントランスマーズ第十話脅威！メナゾールモンの配下。」

「すうじことになりそうだ。」

## 第九話 合体進化と完全体進化（後書き）

次回もまた見てね。

九代將軍は、トランسفォーマーZから取り入れました。ネタばれですが、ベルゼブモンは、オーバーロードモンに。ベルフェモンは、オボミナスモンに倒されています。

## 第十話 齊威！メナソールモンの配下（前書き）

ついでにデジテストロンの組織構造が少しずつ明らかになっていく。

## 第十話 震威！メナゾールモンの配下

「デジテストロンは、謎の会議を行つていた。

「デジサイバトロンが強くなつていても、我々にはどうでもいいこと。」

メナゾールモンの配下は、フォースカイドルスモン（完全体）、サウンドブラスタモン（完全体）、スラストモン（アーマー体）、デッジエンドモン（完全体）、ワイルドライダー・モン（成熟期）、ドラッグストライプモン（成熟期）、ブレークダウモン（完全体）、モーターマスター・モン（究極体）、ウェザーブレイクモン（完全体）、インフォメーション・ダーグレイモン（完全体）と大勢いる。

とくに、この会議に出席していないデジモンがいた。

スラストモンである。

デジタルワールドで一番砂漠化が激しくなつてている場所があつた。

デジサイバトロンは、砂埃を避けまくつていた。

「それにしても、砂漠つて暑いと思つたけど・・・この砂漠、妙に寒いな。」

「夜でもないのに。」

スラストモンが、デジサイバトロンを叩撃した。

「此の俺様が、砂嵐を起こしてやるぜ。」

スラストモン アーマー体 必殺技「臨場痛感嵐」

「臨場痛感嵐！」

バスター・モンが見た。

「何だ、でつかい砂嵐だな！」

「砂嵐？みんな逃げる！」

デジサイバトロンは、右によけようとしたが、砂嵐に巻き込まれてしまった。

コンボモン達は、デジタルトランスフォームをしていた。

「大丈夫か、大次？」

「ああ、大丈夫だよ。」

ほかのみんなも無事だが、砂嵐に巻き込まれたことにより、目的地が分からなくなっていた。

「しかもここはどこ？」

6体と4人は、囚われの身となっていた。

「ソルから出せー。」

メナゾールモンの配下の一人である、ウェザーブレイクモンとストモンが笑っていた。

「ここから出そなで、嫌だね。デジサイバトロンは死ぬまでそこにはな。ハハハハハハハ」

左利とマグナスモンは、牢屋の壁の一部を切り取った。

「江利彦くん、これを。」

「エネルゴンカード2枚もあつてどうするんだよ。」

「大次くんがエネルゴンカード一枚、デジヴァイスにセットしたとき、進化したのよ。」

「つまり、俺達もそれができるのか。」

「俺にはくれないのか？」

鬼束が言った。

「鬼束、あんたにもついているでしょー。デジヴァイスにある機能。」

「ほんとだ。全然気が付きもしなかつたよ。」

フライトモンとマッハアラートモンは、いい案を思いついた。

「俺達が、此の鉄格子を壊す。君達は、先に逃げてくれ。」

「テラー・コンデジモンが襲ってくるかもしれないぜ。」

「その時は、俺達で食い止める。」

「分かつた。」

マッハアラートモンとフライトモンは、鉄格子を壊した。

「予想通り、テラー・コンが来たぞ。」

「デジタルトランスフォーム！」

コンボモン達は、大次達を乗せて、外へ出た。

「脱出しただと…」

大次と江利彦と左利は、エネルゴンカードを一枚差し込んだ。

「POWER SET EVOLUTION」

「コンボモン進化、ファイアーコンボモン！」

「ジェットモン進化、スカイファイアモン！」

「マグナスモン進化、ウルトラマグナスモン！」

鬼束は、エネルゴンカードを一枚差し込んだ。

「EVOLUTION」

「バスター・モン進化、ランドマイインモン！」

ウホザーブレイクモンとスラストモンは、攻撃をし始めた。

「天気の狂氣・元凶！」

「臨場痛感嵐！」

三体の完全体デジモンと一体の成熟期デジモンは避けた。

「トワイライトバースト！」

ラングマインモンの攻撃は、スラストモンにかすった。

「こんな攻撃弱いぜ！」

「作戦通りだぜ！」

「なに？」

スラストモンとウホザーブレイクモンは、上を見た。

「罷かー！」

「聖剣プライムフォース！」

「ウルトラゲリラハリケーン！」

「スピードオブクラッシュヤー！」

3体の攻撃が合体して、スラストモン達を襲つた。

「無念！」

「メナゾールモン殿とメガトロモン様万歳！」

スラストモンとウェザーブレイクモンは、消滅した。

マッハアラートモン達がやつてきた。

「この場所、昔は緑のあふれる場所だったんだ。しかし、ウェザーブレイクモンがこの場所の気候を変動させたせいで、砂漠化しちゃつたんだ。」

デジサイバトロン達は、次の場所に移動し始めた。

デジテストロンで、一人の死を見たメナゾールモンは激怒していた。

「何という不覚だ。奴らが完全体のデジモンまで進化するだけでなく、いざれ究極体になる可能性があるぞ！…どうするんだメガトロモン様！」

スタースクリームモンは、メナゾールモンを殴った。

「おまえ、仲間を失つたからって激怒してメガトロモン様に牙をむくような発言はやめたまえ！」

スノーストームモンとアイアントレッドモンは、デジサイバトロンより先にある場所にいた。

「よつ、ブラーモン元氣か。」

次回予告

「スノーストームモン達を発見！」

「どうも異臭いような気がしてきたぞ。」

「今度は、怪物みたいなデジモンが出てきたぞ！」

「次回、デジモントランスマーブ第十一話「きなり究極体出現！オボミナスモン」

「す、じことになりそ、うだ！」

## 第十話 齊威！メナソールモンの配下（後書き）

次回もまた見てね。シーズン1は、15話目で終了です。

## 第十一話 いきなり究極体出現！オボミナスモン

そこは、デジテストロンのヴィーコノトジモンが、いろんなデジモンを奴隸にしていた。

「おいつ働きやがれ、デジテストロンの利益のために働け！」

グラディモンは、ヴィーコンデジモンに言った。

「罰を与えないで、休んだらすぐここ……」

「休むな！アックスブルガー！」

グラディモンは、容赦もなく殺されてしまった。

デジサイバトロンの一人、ブラーモンも奴隸になっていた。

そのほかにも、クロックモン、グロットモン、クリアアグモン、ギンリュウモンなどが奴隸としてひどい扱いを受けていた。

デジサイバトロン達は、ブラーモンの「OSU信号」を元に駆けつけていた。

江利彦達は、コンボモン達から降りた。

「デジモン達が……」

「奴隸にされているのかよ。」

「許せないぜ！なあ大次。」

「ああ、許せはしない。『デジデストロン』のヴィーコン軍団を一気に  
つぶすぞ。」

「おお、うー。」

「EVOLUTION」

「コンボモン進化、コンボグレイモン。」

「マグナスモン進化、ウルティマスモン。」

「ジエットモン進化、ジエットスカイモン。」

「バスターモン進化、ランドマインモン。」

「LINK UP EVOLUTION」

「コンボグレイモン！」「フライトモン。」「リンクアップブーコン  
ボグレイモンフライトモード！」

「ウルティマスモン！」「マッハアラームモン。」「リンクアップブ  
ーカー！ウルティマスモンマッハアラートモード！」

二体の合体デジモンと2体の成熟期が、ヴィーコンデジモン集団に  
攻め入った。

「アックスブルガー！」

「ノーマンダーフレイムミサイル！」

「ウルトラインパクトー！」

「ジェットミサイル！」

「ホットボムバスターー！」

アックスブルガーを相殺させずに、ヴィーコンデジモン達に蹴散らしていった。

「ブラー・モン、ジェットスカイモンとリンクアップだ。」

「わかった。」

「LINK UP EVOLUTION」

「ジェットスカイモン。」「ブラー・モン。」「リンクアップ！-ジェットスカイモンブラー・モード」

「行け！-ジェットスカイモンブラー・モード！」

「スピーディミサイルズ！」

無数に放たれたミサイルがヴィーコンデジモンを一気に倒した。

「助かったよ。デジサイバトロン。」

しかし、喜びもつかの間だった。

「妖怪の大鎌！」

町の半分が滅亡した。

「私の下級戦士共を、良くもやりやがったな。」

オボミナスモン 究極体 必殺技「恐怖の幻転殺破」

「究極体！」

「「」のままだと勝てないぞ。」

「一か八かやってみないと分からぬだらー。トワイライトバースト  
！」

オボミナスモンはびくともしなかつた。

「痒いぞ。馬鹿にするなー。テスランー！」

デジサイバトロン達は、一気に吹き飛ばされた。

「ぐつ、なんていうパワーなんだ。」

オボミナスモンの配下の一人、キュウキモンがやつてきた。

「オボミナスモン殿、戦艦「りしきものが」「ひかり」。」

「なにつー。」

「デジタルランスフォームー・フォートレスモン。」

フォートレスモン 成熟期 必殺技「クラシックオブレーザーテンション」

「戦艦も姿を変えろ!」

「フォートレスモンの頭と胴体が合体した。」

「フォートレスモンマキシマスマード...」

フォートレスモンマキシマスマード 究極体 必殺技「マスター・ソードプライムスピリット」

「ほお、俺の仲間蹴散らされたのか。」

「これでお前もおしまいだ。オボミナスモン...」

次回予告

「オボミナスモンとフォートレスモンが戦う。」

「ひえええええ!究極体同士の争いだ。」

「スノーストームモン達を見つけ!」

「やばつ、見つかっちゃったぜ!」

「次回、デジモントランスマーブルーズ第十一話フォートレスモンvsオボミナスモン」

「いやまあ、ここはなつかしいだ。

第十一話 いきなり究極体出現！オボミナスモン（後書き）

次回もまた見てね！

## 第十一話 フォートレスモン vs オボミナスモン

オボミナスモンは、たぐらみを考えた。

「キュウキモン、デジサイバトロン共を頼む。俺は、フォートレスモンを殺る。」

スノーストームモンとアイアントレッジモンは隠れていた。

「あんな奴らに任してはいけないんだよ。」

「俺達の出る幕じゃないな。」

コンボグレイモンフライモードは、アイアントレッジモンを見つけた。

「見つけたぞー。」

「ブレイドツイスターー！」

キュウキモンの技がコンボグレイモンフライモードに命中した。

「ウルティマスモンマッシュアラートモード、キュウキモンを押され  
て。」

「分かった。」

キュウキモンは、ウルティマスモンマッシュアラートモードのスペー  
ドを誘導するかのように行動していた。

「ジコットスカイモンブラー モード、分離。」

「POWER SET EVOLUTION」

「ジコットスカイモン進化！スカイファイアモン！」

「左利」「なーに江利彦さん。」「キュウキモンは、ウルティマスモンを誘導している。俺がここを崩せば、つまくいく。」

「ウルティマスモン」マッハアラートモード、言ひたん逃げて！』

「分かった左利。」

「あと少しだったのに。」

キュウキモンの背後にスカイファイアモンがいた。

「スピードオブクラッシュヤーー！」

「なにひーぎやああああああ

キュウキモンは消滅した。

ランدمайнモンは、スノーストームモンとアイアントレッドモンを追いかけた。

「アイスピーム！」「アイアンハイドレッドモン

「くづ…鬼束。俺も完全体になる。」

「ああ、それを望んでいたんだぜ。行くぜラングマインモン。」

「POWER SET EVOLUTION」

「ラングマインモン進化！ロードバスターモン！」

アイアントレッドモンとスノーストームモンは、ロードバスターモンを見た。

「俺たちやばいじゃ……」

「スペイナルフレアキャノン！」

渦を描くミサイル一発がアイアントレッドモンとスノーストームモンの手前に落下し、一体を巻き込んだ。

「あーれ——キラーン。青空を見上げたら、僕達のことを思い出してくださいね。」

フォートレスモンとオボミナスモンは、こらみ合っていた。

「恐怖の幻転殺破！」

フォートレスモンに命中して、フォートレスモンを倒れるが……

「オボミナスモン、御前の力を封じさせてもらつた。」

「なに！ いつの間に・・・はつ！」

「マスター、ソードプライムスピリット…」

「ぐわああああああああああああああ…」

オボミナスモン消滅。

ヘッドモードになった。フォートレスモンは、デジサイバトロンと握手を交わした後、戦艦の上に乗り、旅立つていった。

一方、別の場所では・・・

「ジンライモン貴様・・・」

ボロボロになつてゐるデジテストロンの一人組。

「悪いが君達には、滅んでもらつ。デジタルワールドの未来のため  
に。『マンティカルメガパンチ！』

デジテストロンのデジコードを吸い上げてゐるジンライモン。

ジンライモン ハイブリット体 必殺技「コマンティカルメガパン  
チ」

ジンライモンは、一人の少年ジャック・ジャンバルに変わった。

「そろそろ、合流時かな?」

次回予告

「鏡だらけのこの場所。」

「先が進めにいいから怖いよ。」

「左利ちゃん。僕が守って・・・痛つ！」

「鏡に当たつてやんの。ハハハハハハハ

「笑うなバスターモン。」

「次回『デジモントランスマーブル』第十三話鏡を使ったトリック、  
暴けリフレクタモン」

「これはすごいことになりそうだ。」

## 第十一話 フォートレスモン vs オボミナスモン（後書き）

次回もまた見てね！

ジンライモンのことで、少し解説を。正確には、デジプリテンダー  
デジモン。「指揮官」「静寂」「管理」のデジサイバトロンのスピ  
リット、「破壊」「殺戮」「鬼」のデジデストロンのスピリットが  
あります。唐突に超神マスター・フォースの設定を採用してすみませ  
ん。後、デジモンフロンティアも・・・

なんだかんだで、感想お願いします。

## 第十二話 鏡を使ったトリック、暴けリフレクタモン

「デジサイバトロン達は、鏡の道についた。

「鏡だらけの道か。」

コンボモンは少し戸惑いながら言った。

「ねえ、大次。」

「どうしたんだコンボモン。」

「鏡の迷路つて俺、ちょっと怖いんだよ。」

「大丈夫だよ。デジヴァイスに出口を探す機能があるから。」

デジサイバトロン達は、鏡の道の中に入った。

しかしこれは、デジテストロンが仕組んだ厄介な作戦である。

「彼等を鏡の道の中に入れる作戦成功。」

リフレクタモン 成熟期 必殺技「ミラー・シャッター」

リフレクタモンの罠に引っ掛けているとは知らないデジサイバトロン達は、鏡の道の中で迷っていた。

「デジヴァイスが、出口を表示しない。」

「なぜだよ。」

「コンボモン、鏡を一個壊してみたら。」

「ああ、大次。危ないから伏せてくれ。」

「わかった。」

「セットリングアタック！」

一枚の巨大な鏡が割れた。

「大丈夫かコンボモン。」

「ああ、少しワイパーの部分が壊れただけだ。」

大次はデジヴァイスを見た。

「これは、デジデストロン。まさか罠か！」

リフレクタモンは、ワインを飲みながらくつろいでいた。

「ああー、メガトロモン様に此の事を伝えるだけだから少し楽にできる。」

「極楽だぜ。イエー！」

デジサイバtron達が、鏡を割つてやつてきた。

「貴様等。」「どうして出れた。」

「鏡を一枚割れば、お前達の反応で分かつたんだよ。」

「小瀬なことさ。//ラーシャッター！」

シャッター音と同時にデジサイバトロンの近くに巨大な鏡が出てきた。

「鏡を押し倒して、串刺しにしてやる。」

「もうさせない。」

「エボルテロイズム」

「コンボモン進化！コンボグレイモン！」「

「ジョットモン進化！ジョットスカイモン！」「

「バスターモン進化！ラングドマインモン！」「

鏡は、三体のデジサイバトロンに逆に押し倒された。

「ぐつ、俺達の攻撃を。」

「ハマンダーフレイム！」「

「ジョットヴァイー！」「

「トワイライトベースト！」「

リフレクタモンに技が命中し、リフレクタモンは消滅した。

リフレクタモン消滅後、鏡も消滅した。

デジサイバトロン達は、次の町へ目指した。

一方、デジテストロンの一人、スタースクリームモンはデビモン達の住む町にいた。

「強制リンクアップ！」

「やめろーー！」

「助けてくれーー！」

「吸収されるー！」

デビモン達の叫びは、スタースクリームモンに取り込まれた時には消えていた。

スタースクリームモンデビモン集団吸収体 完全体 必殺技「デスマーテクスクロウ」

「これで、デジテストロンのコーダーが俺になる。」

それを見ていたピコデビモンとインプモン達は、デジサイバトロンが来ることを待ち望んでいた。

「どうか、来てください。デジサイバトロン・・・」

スタースクリームモンティビモン集団吸収体は、ジャックに遭遇した。

「スタースクリームモンか。」

次回予告

「別の場所で戦いが始まっているね。」

「俺達は、『ヒツジ』とした岩だらけの町にやってきたけどなんかいやな予感が。」

「火炎將軍の命令でやってきただと。」

「しかも強すぎる。」

「次回『デジモンストラーンスフォーマーズ』第十四話人間界から来たもの。」

「これはすごいことになりそうだ。」

第十二話 鏡を使ったトリック、暴けリフレクタモン（後書き）

次回もまた見てね。

## 第十四話 人間界から来たもの

スタースクリームモンデビモン集団吸収体は、ジャックと遭遇した。

「貴様、デジサイバトロンの臭いがする。」

「そうだ。それがどうした？」

「お前を倒す。ナルビームデスク！」

ジャックは、宙返りしてナルビームデスクをよけた。

「プリテンダービーストエヴォリューション→ゴットチータスモン！」

「ゴットチータスモン ハイブリット体 必殺技「ギガコンボフルバースト」

スタースクリームモンは、ゴットチータスモンに攻撃をしたが瞬時によけるその速さに驚かされた。

「デスマーテクスクロウ！」

両腕にある鋭い爪がゴットチータスモンに襲い掛かる。

「超神烈熱拳連打！」

「なにつー！」

「ゴットチータスモンの皿にも止まらぬ速さでパンチし続けた。

「ぐつ、これならどうだ。デスバーストイントクス！」

その攻撃は、ゴットチータスモンを吹き飛ばした。

「よしひける。んつ？」

「喜んでいられるのも今の内だー。ギガコンボフルバースト！」

スタースクリームモンは、この攻撃に巻き込まれて空高く舞い上げられた。

「ぐわあああああ！」

一方、大次たちがいる方では・・・

岩だけの街にやつてきた。

「コンボモン。この町もテジテストロンの支配下にいる。」

「大次の言うとおりだ。テジテストロンの勢力がますますわかるようになってきたぜ。」

江利彦は、鬼束に言った。

「例の作戦、実行しようかと考えている。」

「あの作戦なら行けると思う。」

左利とマグナスモンは、一人の会話を？マークで聞いていた。

「みんな、降りてくれ。デジタルトランスフォーム！」

大次達は、青ざめながらようやくいるゴーレモンを見つけた。

「大丈夫か。」

「デジデストロンの奴隸になりたくないから逃げてきた。君たちデジサイバトロンだよね。」

「ああ、そうだけどこいつよりゴーレモン。なんでここにいるんだ？」

「」の町は、岩系のデジモンに適している町なんだ。」

その時、テラー「」がロープでゴーレモンを縛った。

「ぬつ、デジサイバトロンー！」

「」にもいたのか。デジサイバトロンのくそどもが。」

サディストドラモン 完全体 必殺技「キリイングファニイ」

サディストドラモンは、爆撃機からロボットに変形した。

「」こつらを殺した後に、俺がたつぱり魂で遊ぶか。」

「やせるか。いぐそコンボモン。」

「おひーー。」

「power set evolution」

「コンボモン進化、ファイアーコンボモン！」

サディストドラモンはファイアーコンボモンを見た。

「雑魚か。キリングファーナー！」

紫色の炎がファイアーコンボモンを襲った。

「力がとられていく・・・」

「まずい、ファイアーコンボモン上手く避けるー。」

「どうすればいいんだ。そつかあの口の中にこいつを流し込むー！ プライムテストロイヤー！」

「なにーー！」をああああああ

サディストドラモンは消滅した。

しかし、コーレモンは連れ去られてしまった。

大次達は、あることに気が付いた。

「そういえば、デジサイバトロンの別軍が足止めされているとか言ったよな。」

「確かに、もしかしたら足止めが大変なことになつてゐるかも知れない。」

「俺たちで助けに行こうぜ！」

「デジタルトランスフォーム！乗つてくれ大次第。」

「わかつた。」

「デジサイバートロンに別のデジサイバートロンがいた。」

次回に続く

次回予告

「デジサイバートロンの別の軍には、あの者たちが。」

「しかもフォースチップが発動されるぞ。」

「なんかやべえことになりそうだぞ。」

「次回、デジモントランスフォーマーズ第十五話フォースチップ発動！放てガイアフォース」

「これはすゞいことになりそうだ。」

第十四話 人間界から来たもの（後書き）

次回もまた見てね。

## 第十五話 フォースチップ発動！放てガイアフォース

別のデジサイバトロンは、ショックウェーブモンに邪魔されていた。

「こいつ、強すぎやしない。」

「ソニックイングモン、弱音を吐いてどうするのよ。一気にぶつかりなさい。」

「分かった。朗利！ソニックショットー。」

ショックウェーブモンは、避けた。

その後ろに、ドリークラッシュモンがいた。

ドリークラッシュモン 完全体 必殺技「夢壊し・人格崩落」

「ふふふ、ゴッモンズ、アイスマonz。強制リンクアップ。」

「ドリークラッシュモン ゴッモンアイスマonz吸収体 完全体 必殺技  
「夢殺し・隕石つぶし」

4人の者達は、デジサイバトロンのメンバーであった。

「朗利、別のデジサイバトロンが来た。」

「いぐも、コンボモン。」

「おおー。」

「power set evolution」

「コンボモン進化、ファイアーコンボモン！」

4人は驚いた。

「完全体にまで進化したのか・・・」

ドリークラッシュモンは、ファイアーコンボモンを見た。

「そこまで進化していたって、意味がねえんだよ！夢殺し・流水破滅！」

氷の破片が、ファイアーコンボモンに刺さった。

「ファイアーコンボモン！」

「大丈夫だ大次。こいつのコントロールを狂わせる。コンボイトライデントリボルバー！」

ドリークラッシュモンは、スピードが非常に速かった。

「なぜだ。動きが早すぎる。なに？！」

「夢殺し・隕石つぶし！」

巨大な隕石が、ファイアーコンボモンに目がけて飛んできた。

「避ける！」

ファイアーコンボモンは、軽やかに避けた。

その時、チップみたいなものが大次のところに飛んできた。

「これはなんだ？」

ポットモンは、それを見てることを言った。

「それは、フォースチップですね。」

「まさか、デジヴァイスに差し込めば。」

ファイアーコンボモンは、ドリークラッシュモンに吹き飛ばされた。

「よしつ！ フォースチップブイグニッショーン！ ガイアフォース。」

ファイアーコンボモンは両腕に大地から力を集めて赤い球体を作り出した。

「食らえ、ガイアフォース！」

「夢殺し・隕石つぶし！」

隕石つぶしの技が碎かれた。

「なつ、これは究極体の力、俺では勝てない。」

ガイアフォースを受けたドリークラッシュモンは、悲鳴を上げて消滅した。

「やつたー！」

4人の名前と「デジモンの名前は、以下のとおりである。

かめやまかるひす  
**亀山駢呂栖**、パートナー「デジモン」、バンクモン

はせがわいび  
**羽瀬川古尾**、パートナー「デジモン」、ガーシェルモン

はせがわばど  
**羽瀬川暎渡**、パートナー「デジモン」、ポップモン

とうじょうらうり  
**東条朗利**、パートナー「デジモン」、ソニックモン

これで8名になった。

一方、デジテストロンは・・・

「メガトロモン様、今回の失敗は・・・」

「わしの追及ミスだ。レーザーウェーブモン。デジサイバトロンを監視しろ！」

「了解、メガトロモン様！」

新たな力が加わったデジサイバトロン。しかしデジテストロンの動きはどこまでなのは、まだわからない。

次回予告

「次の街は、江戸時代っぽい街並みだ。」

「でも、デジテストロンにとやかれているんだ。」

「忍者トランسفォーマー『ジモン』、メタルヴァンパイモン参上…これがより貴方たちの命を奪います。」

「いや、ウルトラマグナスモン…フォースチップイグニッショーン！」

「次回 デジモントランسفォーマーズ第十六話『れいしゃウルトラだ！メガデスのイグニッショーン』

「これはすげこことになりそうだ。」

## 第十五話 フォースチップ発動！放てガイアフォース（後書き）

次回もまたみてね！

フォースチップイグニッショングリーン挿入歌「イグニッショングリーン心を超えて」

進化挿入歌「エネルゴン進化」

モードチェンジ挿入歌「スーパー エネルゴン」

超ジョグレス進化挿入歌「守護神の調べ」*The Guardia*

n e x a m i n e s

## 第十六話 これこそウルトラだ！メガテスのイグニッシュョン

「デジテストロンの9大將軍の一人、ブラックザラックモンは部下の一人メタルヴァンデモンを呼び出した。

「ブラックザラックモン殿、私にデジサイバトロンの排除を。」

「お前なら、できるとメガトロモン様も信じている。」

「それならば、私に兵をください。」

「数は、どれぐらいだ？」

「テラーノンを1000体、ヴィーコンを1000体です。」

「承知した。其方に派遣しよう。」

「有り難く頂戴いたします。」

一方、デジサイバトロンは・・・

「江戸時代みたいな街並みだ。」

「綺麗ね。」

ソニックモンは、郎里に言った。

「俺は、興味ないな。」

「あんたが興味なくても私は興味があるのよー。」

「うう・・・すまん。」

ほかのみんなは、皿が点になっていた。

しかし、奇妙な空氣に包まれていた。

「強制リンクアップ!」

メタルヴァンデモンは、イガモンとシコリモンとムシャモンをリンクアップさせた。

「メタルヴァンデモン忍者モード!」

「あつー。」

「デジテストロン!」

メタルヴァンデモン忍者モードは、デジサイバトロンを見た。

「IJの場所もデジテストロンの支配下になっていたのか。」

「悪いが。IJより君たちの命をもらいます。行けドラーーンヒュイーーン!」

デジサイバトロンの8人は、デジヴァイスを掲げた。

「power set evolution!」

「コンボモン進化、ファイアーコンボモン！」

「マグナスモン進化、ウルトラマグナスモン！」

「ジョットモン進化、スカイファイアモン！」

「バスターモン進化、ロードバスターモン！」

「evolution」

「バンクモン進化、グラップモン！」

「ガーシェルモン進化、ガードモン！」

「ソニックモン進化、ソニックイングモン！」

「ポップモン進化、ポットモン！」

ウルトラマグナスモンは、メタルヴァンデモンに立ち向かった。

ほかのみんなは、テラー・コン達を殲滅していた。

「ウルトラハリケーン！」

メタルヴァンデモンは手裏剣で相殺した。

「ふつ、忍者型のデジモンを吸収して正解だったぜー！」

「なに？」

「ギガヘルストーム！」

「うわあー！」

「ウルトラマグナスモン！」

郎里は、ソニックイニングモンに言った。

「リンクアップ進化よ。」

「link up evolution!」

「ソニックイニングモン」「ライトモン」「リンクアップ進化！ソニックイニングモンライトモード！」

「プライドバーストアタック！」

音速を超えた攻撃がテラー・コン達に襲いかかった。

その時、一つのフォースチップが落ちてきた。

「これは、フォースチップだわ。」

メタルヴァンデモンは、ウルトラマグナスモンを殴り続けていた。

「メタルヴァンデモン、このフォースチップを見なさい。」

「なにつ、友情のフォースチップ！」

「フォースチップイグニッショーン！メガデス！」

ウルトラマグナスモンの胸元に光があふれ出た。

「いぐぞ。俺を此処まで殴り続けた罰だ。メガデス！」

放された光がメタルヴァンデモンを貫き、近くにいたテラーコン<sup>5</sup>体も巻き添いを食らった。

「ブラックザラックモン殿、申し訳ございません。」

メタルヴァンデモンとテラーコンは消滅した。

「やつたー！」

「す、じ、い。」

デジサイバトロンは、また更に強くなつたと思つていた。

一方、別のデジサイバトロンは・・・

「逃げたか。」

ジャックは、スタースクリームモンの残した謎のデジモン文字を見ていた。

「あいつは、恐ろしいことを企んでいるよ！だな。」

スタースクリームモンの企んでいることじまー一体？

デジテストロンは・・・

「やはり、デジサイバトロンの行動を読めなかつたのか。」

「ブラックザラックモンはメガトロモンに通信をとつた。

「どうだ。メタルヴァンデモンは？」

「残念ながら敗北しました。」

「しかしこれで分かつた。デジサイバトロンの行動力をうまく読み  
ば怖くはないだろう。」

「そうですね。」

ブラックザラックモンは、次の刺客を用意していた。

次回予告

「スタースクリームモンがやつてきたよ。」

「メガトロモンを倒す前に、お前等で手合わせしてやる。」

「上等だ。かかるて!」

「これは、完全体の力。」

「次回、デジモントランスフォーマーズ第十七話ガードモン進化。」

「これはすごいことになりそうだ。」

## 第十六話 これこそウルトラだ！メガテスのイグニッショーン（後書き）

次回もまた見てね！

シーズン2OP主題歌「気高き勇者になれ！」

シーズン2ED主題歌「もう一回、もう一回」

## 第十七話 ガードモン進化

「デジサイバトロンは、別の町に移動することにしていた。

「コンボモンとマッハアラートモンは、会話をしていた。

「マッハアラートモンの先にある街は。」

「どうも空気が暗黒に包まれているぞ。」

「デジサイバトロンは、謎の暗黒ガスをよけようとしていたのだがそこから現れたのはスタースクリームモンだった。

「デジサイバトロンのじみどもか。ちょうどいい俺の新たな力の生贊になるがいい。」

「ふざけるな！ 貴様の生贊になるわけにはいかない！ 大次！」

「ああ、デジサイバトロン一氣に行くぞ！」

「おひつー。」

「evolution」

「バンクモン進化、グラップモン！」

「ガーシュエルモン進化、ガードモン！」

「ソニックモン進化、ソニックイングモン！」

「ポップモン進化、ポットモン！」

「power set evolution」

「コンボモン進化、ファイアーコンボモン！」

「マグナスモン進化、ウルトラマグナスモン！」

「ジェットモン進化、スカイファイアモン！」

「バスターモン進化、ロードバスターモン！」

「link up evolution」

「ファイアーコンボモン！マッハアラートモン！リンクアップ進化！ファイアーコンボモンマッハアラートモード！」

「ウルトラマグナスモン！ブラーモン！リンクアップ進化！ウルトラマグナスモンブラーモード！」

「スカイファイアモン！フォートレスモンインフィニティーガン！リンクアップ進化！スカイファイアモンインフィニティーガンモード！」

「ロードバスターモン！ライトモン！リンクアップ進化！ロードバスターモンライトモード！」

デジサイバトロンの最大攻撃が始まった。

スタースクリームモンは、憤怒のフォースチップを持っていた。

「フォースチップイグニッショーン！」

「なに？！」

「フレイムインフルノ！」

8体のデジサイバトロン達は吹き飛ばされた。

「みんな大丈夫か？」

「くつ、奴もフォースチップを使えるのかよ。」

「ふふふ、俺は更に強くなる檻より出て来い！」

檻が大地から現れた。

「左にリボルモン、右にグレイドモン。此の一體のデジモンを俺の力にすれば更に強くなる。」

「そんなことはさせない。プライムデストロイヤー！」

スタースクリームモンは、デビモンの翼で体を守った。

「こいつ、すでにリンクアップしているぞ。」

「なに？！」

「俺は、更にリンクアップする。リボルモン、グレイドモン。強制

リンクアップ！スター・スクリームモンフォースモード！

「アーテックスキャノン、ブレード！」

デジサイバトロン8体が束になって掛かってきてもスター・スクリームモンの敵ではなかつた。

「お前達、弱すぎるつまらない一瞬で消してやる！」

「そう簡単に倒されてたまるか！」

古尾のデジヴァイスが光つた。

「power set evolution」

「ガードモン進化、ガードシェルモン！」

「ダークネスアーテックスキャノン！」

「ホイルハリケーン！」

二つの技は相殺されて消えた。

「なに！進化しているだと！」

「リンクアップばかりでは、完全に力は入ってこないぞ！」

「黙れ！アーテックスブレード！」

両手で刀を押さえたガードシェルモン。

「黙れのセリフ、こいつのセリフでもある。ビルダマックストルネード！」

「どうああああああ！」

爆発音とともに、歓声が上がった。

「やつたー！」

「ありがとな、ガードショルモン。」

「ああー。」

デジサイバトロン達は、次の町へ急いで移動し始めた。

一方、スタースクリームモンは・・・

「デジサイバトロンの不意打ちは許せん。デジテストロンのリーダーになつてデジサイバトロンを皆殺しにしてやる。」

どうやら、メガトロモンを裏切るつもりである。

次回予告

「メガトロモン、貴様を裏切る準備は整つている。」

「愚か者が、ここまで来るとはな。」

「悪いが俺がデジテストロンのリーダーになる。」

「デジテストロンの反乱が俺達にも影響していくやー。」

「次回、デジモントランスマフォーマーズ第十八話『反乱！メガトロモンVSスタースクリームモン。』

「これはすこことになりそうだ。」

第十七話 ガードモン進化（後書き）

次回もまた見てね！

## 第十八話 反乱！メガトロモンvsスタースクリームモン

スタースクリームモンは、戦闘機に変形していた。

「メガトロモンを倒すことで俺はすべてを司れる。」

メガトロモンは、部下の「デジモン」とともに奴隸にしている「デジモン」達に重労働をさせていた。

「もつと働け！でなければデジタマ」とを消滅させてやるー。」

スノーストームモンとアイアントレッドモンは、鞭で奴隸「デジモン」を制裁していた。

デッドラーストームモンとブラックアウトモンは、スタースクリームモンを見つけた。

「デジデストロンの恥さらしが返つってきたぜ。」

「ああ、メガトロモン様に」「報告だ。」

「メガトロモン、お前等の後に続く。」

「こいつ、俺達を追いかけるつもりか。そりはいくか。」

メガトロモンは、通信を聞き駆けつけた。

「う」苦労。後は地上で活動をしろー。」

「了解しましたメガトロモン様。」

ブラックアウトモン達が地上に降りたことにより、一人になつた。

「久しぶりだな。デジデストロンのゴミが。」

「メガトロモン、貴様を倒して奴隸を解放しデジサイバトロンと協力できるデジデストロンを作り出してやる。」

「スタースクリームモン、お前には不可能だ。デジデストロンはわしの支配下だ。」

「フォースチップライグニッショントー！ダブルインパクト！」

「ダブルインパクト！」

「くっ、スタースクリームモン、あそこにいる少女は誰だ。」

「俺は、デジデストロンという観点を捨てる。人間界から来た少女、  
阿連種の説得で、俺の目的が変わった！」

「愚か者が、デッドオーバー！」

スタースクリームモンは、デビモンの翼でガードをした。

「小癪にも程があるぞ！」

「アーテックスブレード！」

メガトロモンを斬りまくるスタースクリームモン。

「メガトロモン様がやられているぞ！」

「どうやら貴様とは。本気で殺り合ひしかないようだな。」

「俺は、デジテストロンに革命を起こす！」

「貴様に革命などは起こせない。死ねー！」

阿連種は、フォースチップを挿入した。

「フォースチップブイグニッショーン！ロイヤルセイバー！」

「ロイヤルセイバー！」

「デッド・タイムブラスト！」

二つの技が相殺し、大爆発を生んだ。

「大丈夫か、阿連種？」

「ええ大丈夫よ。」

メガトロモンは、スタースクリームモンとの戦いで引き分けになつたことを悔しがつたていた。

「デジサイバトロン」と、消してやる。」

次回予告

「」の町は、デジテストロンの配下になつていね。」

「でも、デジテストロンの気配を感じる。」

「おいらの気は、ヒートブレイクモン。」

「デジテストロン。」

「次回デジモントランスマーザ第十九話気配を隠す敵、エリートブレイクモン。」

「これはす」ことになりそうだ。」

第十八話 反乱！メガトロモンVSスタースクリーミモン（後書き）

次回もまた見てね！

## 第十九話 気配を隠す敵、エリートブレイクモン

メガトロモンは、企みを変えた。

「8つの将軍よ、デジサイバトロン殲滅のために集まるがいい。」

超神将軍オーバーロードモン

怪魚将軍キングポセイドモン

野獸将軍ブレダキングモン

技術将軍デバスタモン

情報将軍メナゾールモン

火炎将軍レッドティカスモン

恐竜将軍ダイナザウラーモン

暗黒将軍ブラックザラックモン

8大將軍は、デジテストロン本部に集まつた。

「これからは、わしの指揮ではなく、7大魔王のデジモンの一人に任せた。紹介しようルーチェモンフォールダウンモードだ。」

「吾の名は、ルーチェモン。あなた達が8大將軍ですか、一人の將軍がないことを思えば、デジサイバトロン軍の勢力拡大を何とし

ても阻止すべきだ。いいな！」

「了解！」

一方、デジサイバトロンは・・・

「次の町は、デジテストロンが支配していないね。」

「でも、気配がおかしい。」

デジテストロンのエンプレムがすでに出ていた。

「隠していたのか。」

「その通りだ。大次達デジサイバトロンの諸君。」

「デバスタモン様。」

エリートブレイクモン。

「エリートブレイクモン、こいつ等を尾行して、苦労。さあ、攻撃するのだ。」

「デバスタモンを倒したいけど、エリートブレイクモンの形態が究極体では俺達に勝ち目がない。」

「エリートスホロー！」

「大次、地面を切り取つて何しているんだよーまさか、俺は更なる進化を。」

「行くぞー ロンボモンー！」

「おうー。」

「ENERGON evolution」

「コンボモン進化！ オプティマスプライモンー！」

オプティマスプライモン 究極体 必殺技「マトリクスコマンダー  
アタック」

「究極進化しただとー！」

「ロマンダージャスファイアーー！」

「ぐわあああー！」

エリートブレイクモンが消滅した。

「次は、お前だデバスタモンー！」

「なに、舐めてもうつたら困るぞ。クリエイトキルー！」

次回予告

「デバスタモン、めりやくひやく強こよー。」

「」のままでは勝てないどうすれ<sup>ムフ</sup>。」

「私のマグナスモンも究極体になれる!」

「次回、第一二十話『ゴッドマグナスモン、一体の究極体デジモン誕生!』

「これはすごいことになりそうだ。」

第十九話 気配を隠す敵、ヒートブレイクモン（後書き）

次回もまた見てね！

## 第一十話 ゴッドマグナスモン、一体の究極体デジモン誕生！

「クリエイトキル！」

オプティマスピライモンを攻撃を避けて、次なる行動を見せた。

「デジタルトランスフォーム！」

巨大な戦闘機に変形して、デバスタモンを吹き飛ばした。

「くつ、こいつそんなに俺を怒らせたいのか。」

「私は、デジタルワールドの平和のため、お前に怒涛の鉄拳を食らわしてやる！デジタルトランスフォーム・マトリクスコマンダーアタック！」

しかし、デバスタモンは罠を作っていた。

「何、こいつ等は・・・」

「ふふふ、俺の手下どもだ！」

デバスタモンのもとにいるデジモンは技術に携わる凶悪デジモン。

ブレイクドラモン（究極体）、メガコクワモン（完全体）、プラスカブテリモン（究極体）、マイナスクワガーモン（究極体）、ドライバンスマон（クロス形態）、メカニクルズグラウモン（完全体）、ハッキングデビモン（成熟期）、トラブリットモン（完全体）、シユーテインクモン（成長期）がデバスタモンの配下デジモンである。

彼等は、成長期21万5千体。成熟期5万体。完全体4500体。クロス形態150体。究極体75体いた。

「こんな絶望的じゃないか。究極体に進化したのはいいが。」

大次は焦りを見せていた。

「マジでむかつくぜ！鬼束、自分は完全体になり、マッハアラートモンとリンクアップします。」

「よし、行くぜ！おいつ、大次！加勢してやるぜ！」

「サンキュー鬼束。」

「power set evolution」

「バスターモン進化、ロードバスターモン！」

「link up evolution」

「ロードバスターモン、マッハアラートモン。リンクアップ進化！ロードバスターモンマッハアラートモード！」

「行くぜ！スパイナルマッハフレア！」

シユーティングモン達が倒された。

「ふーん、ならば一斉に攻撃態勢に入れ！」

「何だと。」

デバスタモンの配下デジモン達は、一斉にデジサイバトロンに攻撃態勢を向けた。

「こままではやられる。」「

ほかのデジサイバトロン達も進化して、どうとかこの苦境を断ち切りとするも・・・

「グラビティブレス！」「プラスレールガンキヤノン！」「

「ぐつ、こまでは倒されてしまつ。」「

「ソニックイニングモン、完全体になれ！」

「ポットモンも、進化だ！」「

「ああ！」「任してください。」「

「power set evolution」

「ソニックイニングモン進化、ウイングセイバーモン！」「

「ポットモン進化、ルーツモン！」「

「いけー！」「

「ウイングエッジ！」「オーパーツハイドレック！」「

一人の攻撃が、ドライバンスモン150体を粉碎した。

フォートレスモンは、胴体と合体した。

「フォートレスモンマキシマスマード・マスター・ソード!」

ウルトラマグナスモンは、ブレイクドラモンの攻撃を受けていた。

左利は、もう一枚のエネルギー・ゴンカードを持つていた。

「ウルトラマグナスモン!」

「左利、そのエネルギー・ゴンカードは進化のカード。」

「ENERGON evolution」

「ウルトラマグナスモン進化、ゴッドマグナスモン!」

デバスタモンは驚いた表情をした。

「なに、究極体が三体もいるだと。」

最後のブレイクドラモンをフォートレスモンマキシマスマードのマスター・ソードで消された。

「残すは、お前一人だ。デバスタモン!」

「くつ、仕方がないまだ秘策を残しているのだ。」

「なに!」

「テクニックデリート！」

デバスターのあたりから地面が消えた。

「まさか、隠しがあるのか。」

デジサイバトロン達は、戸惑い始めた。

「何という卑怯な奴。」

「全くだよ。これでは進化した意味がない。」

「その通り、お前等がいくら進化しても俺の敵ではない。さあ、いでよベルフェモンにたくさんオールスパークの欠片を食べさせてトランسفォーマー化させたベルフェモン、すなわちマジンデバステイックモン！」

「ぐるあああああ！」

マジンデバステイックモン 究極体 必殺技「クロ一・ファイナル

「こいつは、七大魔王でも飼いならしやすいデジデストロンの最強兵器なのさ。ハハハハハハ！」

デジサイバトロンにとって不利な立場になつたのだが……

「ナルビームヘル！」

「ジンライバーストアタック！」

マジンデバステイックモンが倒れた。

デジサイバトロンは、スタースクリームモンとジンライモンの姿を見た。

「えー、スタースクリームモン！ 何でデジサイバトロンに加入しているの。」

「俺にも相棒がついたんだ。阿連種だ。」

「よろしくね、みんな。」

「隣にいるのは？」

「ジャックさんよ。デジモンに進化できるの。」

デジサイバトロンに仲間が加わり優勢に近付いた。

次回予告

「なぜだスタースクリームモン。裏切りよったのか。」

「その通りだ！ 貴様らデジデストロンの悪事に付き合いきれなくなつたからだ！」

「ジンライモン今です。」

「ここは、スタースクリームモンの隠された力を解き放つた方がい

いぞ。」

「えつ？」

「阿連種ちゃん。エネルゴンカードを。」

「これで、究極進化よ。スタースクリーミモン！」

「次回、第二十一話討て！ナイトスクリーミモン、隠された力。」

「これはすごいことになりそうだ。」

第一十話 ゴッドマグナスモン、一體の究極体「ジモン誕生!」（後書き）

次回もまた見てね!

## 第一十一話 討て！ナイトスクリームモン、隠された力

「デバスタモンは、戸惑っていた。

「なぜだ、スタースクリームモンなぜ裏切りよつた。メガトロモン様に抹殺されるのが運命にお前に等しいぞ。」

スタースクリームモンはデバスタモンに喝を入れた。

「メガトロモンの考えていることはデジタルワールドを奴隸世界に変えること。いずれ我々も奴隸化されるということに気がついたのだ。デバスタモン、お前は部下が殺されていく姿を見て無関心だつた。つまり、仲間を信用していない！」

スタースクリームモンが明かした真実は、デジサイバトロン全員を驚かした。

「そういうことだったのか。」

オプティマスプライモンは、右拳を強く握り怒りをあらわにしていた。

大次達は、デバスタモンに叫んだ。

「デジデストロンなんかに、デジタルワールドを支配されてたまるか！」

デバスタモンはマジンテバティックモンを動かした。

「貴様ら廻共に用はなくなつた。デジサイバトロン滅んで死ね！」

「マトリクスフュージョン！」「ゴッドマグナストーム！」「マスターードブレイク！」「

3つの攻撃がマジンデバステイックモンに命中した。

「やつたか。」

「ハハハ。マジンデバステイックモンにお前等の雑魚攻撃が通用しない。」

「クロ一・ファイナル！」

マジンデバステイックモンの攻撃が襲いかかった。

「みんな大丈夫か。」

オプティマスマスプライモンがボロボロの姿になつていた。

「オプティマスマスプライモン！』

「それにゴッドマグナスモン。』

「痛つてーなチクショー。』

ロードバスターモンは、マジンデバステイックモンの行動を見ていた。

「もはやこれまでか。』

スタースクリームモンは、紫の光に包まれていた。

「何だあの光は。」

「阿連種、エネルゴンカードをもう一枚差し込んでくれたのか。」

「ええ、あいつらに邪魔はさせない。大次さん達は、マジンデバスティックモンを。」

「分かつた。行くぞみんな!」 「おう!」

「ENERGON evolution」

「スタースクリームモン進化、ナイトスクリームモン!」

ナイトスクリームモン 究極体 必殺技「アーテックスブレードグレード」

「スタースクリームモンが進化した。」

「行くわよ。ナイトスクリームモン!」

「ああ!ナルビームヘルサプライズ!」

マジンデバスティックモンの両腕を破壊した。

「なに?ー!ー、テクニックデリートー!」

ナイトスクリームモンは、アーテックスキヤノンで撃ち返して弾い

た。

オブティマスプライモンとゴッドマグナスモンは、マジンデバステイックモンに向かって必殺技で攻撃した。

「マトリクスメテオ！」「ゴッドマキシマスノヴァ！」

一つの必殺技が一つとなり、マジンデバステイックモンの心臓部を貫通した。

「ぐわあああああああ！」

マジンデバステイックモン消滅。

「最後は、お前だデバスタモン。」

「ふつ、最後になるのはナイトスクリームモン、貴様だー！」

「アーテックスブレードグレード！」

「なつ、俺の左腕が真つ二つ。よくもーー！なー！」

「これで」「これで終わりだ！アーテックスキヤノンブラスト！」

強い一撃がデバスタモンの体を粉々にした。

「俺の力が、弱すぎだと・・・・うわあああああああ！」

デバスタモン消滅。

デジサイバトロン達は、スタースクリームモンを手厚く歓迎した。

「よひにや、デジサイバトロンへ。」

コンボモンが手を差し伸べた。

スタースクリームモンはコンボモンの手を握り握手をした。

「うわうわだ。コンボモン。それとデジサイバトロン。」

大次と阿連種も握手を交わした。

みんなも交わし、そのあと次に支配されている場所へと向かった。

一方、デジテストロンは・・・

「メガトロモン様、デバスタモンが裏切り者に殺されました。」

「なるほどついにデジサイバトロンに落ちたか。」

次回予告

「次の場所は、どうも変だ。」

「ついにデジテストロンの基地に到着だ。」

「でも様子がおかしい。あそこで何のデジモンは何?」

「それに、超神將軍が。」

「次回、第一二十一話超神將軍と謎のデジモン、謎に満ちた関係。」

「これはなすことにならうだ。」

第一十一話 討て！ナイトスクリー・モン、隠された力（後書き）

次回もまた見てね！

## 第一十一話 超神将軍と謎のトジモン、謎に満ちた関係

スタースクリームモンは、大次達に来てほしい場所があると言った。

「コンボモンも少し興味があると思うのだが、古代の出来事らしい。」

「古代の出来事・・・」

そこには、古代のデジモン達がつづった場所である。

しかし、その一つが破壊されているものを見つけた。

「俺はデジテス特朗軍から抜けた後、周りを探しまわっていた。その時に阿連種と出会い彼女のパートナーになつた。その後にこの遺跡洞窟を発見した。しかし既に見つかっていて、此の伝説の石板の一部が壊されていたんだ。犯人はメガトロモンであると確信がついた。」

「どうして確信がついたんだ。」

「壊された方がカノン砲で一発撃つた痕跡があつたからだ。」

古代デジモン文字を見て、ブラーモンが解読した。

「これはおやぢく、プライマスの誓約です。」

「中身には、かつて<sup>デジタルワールド</sup>電腦世界で皇帝と創造主に似た戦士が戦いその電腦世界を平和にした。その暗黒なる者は消滅した。だが電腦世界

にある「ラストエネルゴン」を十二個集め、強き暗黒エネルギーを持つ者が探すと災いが再び起る。」

ブラーモンは、そのデジモンの名を言った。

「ユニクロモン、デジタルワールドの破壊者。」

大次達は突然、揺れを感じて戸惑った。

「何だ？」

超神將軍オーバーロードモンとダブルフェイスモンが空からの奇襲攻撃をかけて洞窟をふさいだ。

「これでしばらくな、動けまい。」

「デジサイバトロンもとい、スタースクリームモンの抹殺は、俺に任せてくれ。」

「分かった。ブラッドモンとキャンサーモン、行つて始末して来い！」

「了解しました。」

ブラッドモン 完全体 必殺技「ワイルドボールバスター」

キャンサーモン 完全体 必殺技「竜王雷弾墮」

ダブルフェイスモン 完全体 必殺技「デスボイテット」

「閉じ込められたか。」

デジサイバトロン完全体に進化だ。

「ああ、行くぞ！」

「power set evolution!」

「コンボモン進化、ファイアーコンボモン！」

「マグナスモン進化、ウルトラマグナスモン！」

「ジェットモン進化、スカイファイアモン！」

「バスターモン進化、ロードバスターモン！」

「バンクモン進化、レッドアラートモン！」

「ガーシュエルモン進化、ガードシェルモン！」

「ソニックモン進化、ウイングセイバーモン！」

「ポップモン進化、ルーツモン！」

「プリティンダーエヴォリューション！ジンライモン！」

これで全員進化したぜ。

スタースクリームモンはファイアーコンボモンと一緒に閉じ込めている岩を破壊した。

「おつやーー！」

「ちっ、外へ出てきやがった！」

ブランディモンとキャンサーモンは、必殺技で攻撃をした。

「ワイルドボールバスター！」

「竜王雷弾墮ー！」

「突風迅雷ー！」

ジンライモンが攻撃をはじいた。

「あいっー！」

「今だー！」

「オーケー、プライムテストロイヤーー！」

「ウルトラカリケーンブレイクー！」

「ファーストミサイルオールバスターーー！」

「ショットアウトボンバーー！」

「アラジングインパクトー！」

「ホイールハリケーンー！」

「セイバー・ビーム！」

「オーパーツウェーブ！」

「ナルビームヘル！」

「地雷豪霸！」

十個の技のうち八つが何者かにはじかれた。

二つの技は、オーバーロードモンに命中した。

「ぬるいぬるい。」

「くつ、何だ。」

マークンモン 究極体 必殺技「タイフーンビルズキラー」

「なにつ、究極体が・・・」

「いいタイミングに現れてくれたマークンモン。」

「こいつ等、どういう関係なんだ。」

その時、のこぎりのような剣を持った。デジモンがキャンサーモンに襲いかかった。

「何だ此の神聖なる力は。」

「私の名は、サンタジャパリアモン！ 東北三県の力が一つになったデジモンだ。」

サンタジャパリアモン 聖騎士型 究極体 必殺技「バッドエンドクラッシュ」

その姿は、下半身が右手廻の形で、上半身が福島県、両腕は宮城県の形をそして左腕には氣仙沼市と南三陸町の間に絆のホーリーリングを持つ。武器はのこぎりのよつたな剣「リアスブレード」を持っている。

「サンタジャパリアモンだと！ 神聖なる力は悪の手でつぶしてやる！ ブラッドマニアルキャノン！」

サンタジャパリアモンは、拳で技を碎いた。

「なつにっ！」

「東北勇気拳！」

サンタジャパリアモンの左手の拳がブラッドモンの腹部を貫いた。

「そんな馬鹿な・・・ぎゃあああああああ！」

ブラッドモン消滅。

「よくもブラッドモンを。気象異変龍神仕業撃！」

竜巻で攻撃はしようとすると、剣ではじかれた。

「サンタジャパリアモン、強いぞ！」

「貴様らには、分からぬ。東北の思いが私に眠つてゐるのだ。この思いは破壊はできない。バッドエンドクラッシュヤーー！」

リアスブレードが強く共鳴してそれをキャンサーモンに食らわした。

「なつ、私の体が真つ二つに・・・」

キャンサーモン消滅。

「す、じ、い、一、」

次回予告

「サンタジャパリアモンかつけー！」

「まだまだこれから。私の強さは東北三県の思いと一心同体。」

「そんなもの、我々の敵ではないわー！」

「マーゴンモン、おぬしの力では絆を断つことは出来ぬ。」

「次回、第一二十三話仲間の思い、サンタジャパリアモンがくれたもの。」

「行くよスカイファイアモン、ロードハスターモン。究極体に進化だ。」

「これはす、じことになりそうだ。」

## 第一十一話 超神将軍と謎のトジモン、謎に満ちた関係（後書き）

次回もまた見てね！

皆さんは気がつきましたでしょうか。サンタジヤパリアモンですが、ロイヤルナイス候補の一人でもあります。

## 第一二三話 仲間の思い、サンタジャパリアモンがくれたもの

サンタジャパリアモンは、「マー」「ゴンモン」と言つた。

「デジタルワールドを支配しても無駄である。そうメガトロモンといふ者に伝えておけ！」

「伝えるわけにはいかない。」

「そりが、東北勇氣拳！」

「くつ、タイフーンビルズキラー！」

「どうわわわ！」

「サンタジャパリアモン！」

「私の絆のホーリーリングを触るがよい。ロードバスターモン、スカイファイアモン。」

オーバーロードモンが妨害した。

「ミサイルズヘルキルイング！」

「くそー！」

サンタジャパリアモンは怒涛の攻撃を引き起こした。

「邪魔をするなオーバーロードモン！ リアスプライドキャリバー！」

リアスブレードから一筋の希望の光が放たれてオーバーロードモンに命中した。

「なに？！」

サンタジヤパリアモンは、マークゴンモンに不覚を取られた。

「お前は、思いの力で勝とうとしているがそんなものは弱い！ダークリミットショッキング！」

「サンタジヤパリアモン！貴様、離しやがれ！ブラストロード！」

ロードバスターモンは、マークゴンモンを吹き飛ばすが・・・

「スカイファイアモン！」

「こいつでも仕留めれば。」

「くっ、届かない。」

絆のホーリーリングに手を伸ばそうとするスカイファイアモン。

その時、ロードバスターモンがスカイファイアモンの手をつかんだ。

「お前、この技とともに受け死ぬ氣か。」

「そつでもしないと絆のホーリーリングになんて手を伸ばせませんから。」

ロードバスターモンの左手、スカイファイアモンの左腕が絆のホールーリングをつかんだ。

サンタジャパリアモンは共感した。

「IJの素晴らしい絆の力。お前達の力を強く染め上げて見せよう。」

江利彦と鬼束のデジヴァイスにエネルギー・コンカードがもう一枚差し込まれていた。

「これは、もしかして進化できるということか。」

「すげえ、行IJ!ゼロードバスターモン。」

「ねつひー。」

「戦おう!スカイファイアモン。」

「ついに来たぜ!」

「ENERGON evolution」

「ロードハスターモン進化、ロードキングモン!」

「スカイファイアモン進化、ジェットファイアモン!」

一体の究極体が新たに誕生した。

「まさか、更に究極体が。」

「大次、此処は俺達に任せてくれ。」

「分かった。デジサイバトロン、ロードキングモンとジェットファイアモン以外は撤退だ！」

「了解！」

「行くぜ相棒！」

「自分も絆の力が満ちていて最高ですー！」

「行くぜデジタルトランスフォーム！」

「自分が、マー『ゴンモンの注意を引きます。』

「そのあとを俺が攻撃するつていうことかダブル攻撃で行こうぜー！」

「やりまじゅうー！」

ロードキングモンが、マー『ゴンモンの注意を引いていた。

「ここつ、逃げるなー！」

「逃げなんかねえよ。今だー！」

「よーし、ジェットスクランブルー！」

「ファイナルスマッシュヤーー！」

一つの攻撃を受けたマー『ゴンモンは高く空中に舞い消滅した。

オーバーロードモンは、怒りを付けていたがその場を後にした。

ダブルフェイスモンもその場を去了た。

そのあと、サンタジヤパリアモンは人間界に戻ることにした。

「俺達も、デジタルワールドを支配から救って復興しよう。」

「ああ、そうだ。」

「デジデストロンを滅ぼすため、俺達がいる。」

「勇者の心を解放する時だ！」

「おおーーー。」

一方デジデストロンでは・・・

オーバーロードモンはイライラしていた。

「ふざけやがつて、何が進化だ。そんなので喜んでいいのか。俺は、  
ゴニクロモン細胞を使って強化して復讐してやる！フフフフフフ。

」

次回予告

「オーバーロードモンとの最終決戦だ。」

「しかし、あいつ再生能力を持っているぞ！」

「くそ、どうひつて倒せ。」

「そのことなら私に任してくれ。」

「お前は、ダイアトラスマン。」

「次回、第二十四話破壊と呼ばれた正義、ダイアトラスマン見参ー。」

「ゾーンブレードカッタービクトリー！」

「これはすげることになりそうだ。」

## 第一二三話 仲間の思い、サンタジャパリアモンがくれたもの（後書き）

次回もまた見てね！

ダイアトラスマンと言えば、サイバトロン破壊大帝ダイアトラスマンを連想していませんか？ 破壊と呼ばれた正義は、デジトライアでも受け継いでいます。ピクシブでデジモンランスフォーマーズとインデックスの選ばれし子供たちとデジモンアドベンチャーとの選ばれし子供達がもし出会つたらというストーリーを作ろうかなと考えています。

## 第一十四話 破壊と呼ばれた正義、ダイアトラスモン見参！

「デジサイバトロンは、オーバーロードモンの所へ向かっていた。

「オーバーロードモン倒そう一刻も早く。」

「やうだな。古屋。」

コンボモン達は、オーバーロードモンの城を見つけた。

「リリがオーバーロードモンの城か。」

「つこにやつてきたな。」

オーバーロードモンがヴィーコンデジモンズを連れてやってきた。

「貴様等を倒す。準備はしている。殺れ！」

ヴィーコンデジモンズ達がデジサイバトロンに襲いかかった。

「大次。」

「よしつ、行いつ。」「つん。」「ああーー！」

「ENERGON evolution」

「コンボモン進化、オプティマスプライモンー！」

「マグナスモン進化、ゴッドマグナスモンー！」

「ジエットモン進化、ジエットファイアモン！」

「バスターモン進化、ロードキングモン！」

「スタークリームモン進化、ナイトクリームモン！」

「行くぞ！」「こちらは完全体だ。」

「power set evolution」

「バンクモン進化、レッドアラートモン！」

「ガーシュエルモン進化、ガードシェルモン！」

「ソニックモン進化、ウイングセイバーモン！」

「ポップモン進化、ルーツモン！」

「プリティンダーハイブリットヒュオリューション・ジンライモン！」

デジサイバトロンの完全体と成熟期は、ヴィーコンデジモンの排除に向かった。

究極体は、オーバーロードモンを倒しに行つた。

「マトリクスキャノン！」

「ゴッドネスサンダー！」

「ロックオンズスピーディー！」

「ブラストセブンアタック！」

「アーテックスブレードアルファ！」

オーバーロードモンに命中した。

「くつ、しかし俺には再生能力がある。」

「なんだと！」「しまった再生能力があつたのか！」

「オーバーハイスピードバースト！」

「うわああああ！」「強すぎるぞ。」

「再生能力をどうにかするしかない。」

「ああ！でもどうすれば。」

オプティマスプライモンはあることを考えた。

「攻撃しまくれば、みんな行くぞ！』

「おつづー。」

「いくぜえええええええ！」

オプティマスプライモン達は攻撃をし続けたが、オーバーロードモンが完全消滅はしなかつた。

「ははは、お前等の攻撃これではお遊びにしかならないな。」

「駄目か。」

「俺の『デジコア』が城にある限り、俺は復活し続ける。」

「その『コア』を壊せば、良いつもりでござりとだな。」

「誰だ。お前は、ダイアトラスマン…。」

ダイアトラスマントランスマスター型 究極体 必殺技「ゾーンブレードカッタービクトリー」

「まさか、メガトロモン様に殺されたはずでは。」

「殺されたのは私のホログラムだ。」

「ちひ、『まかし攻撃』か。」

「やうやくじつだ。城ごとぶつ壊す！ゾーンブレードカッタービクトリー！」

「城が丸」と破壊されて消滅した。

『デジコア』も一部が欠けた。

「ぎゃやああああああーおのれ、ダイアトラスマン。」

「今だ、オブティマスプライモン達。」

「サンキュー、ダイアトラスモン。これで形勢逆転だ。なつ大上。」

「ああ、ちょうどみんなの分のフォースチップを見つけた。」

「ありがとう。大上。」

「フォースチップブイグーッショーン！アクセルアーム！」

「フォースチップブイグーッショーン！フレアバスター！」

「フォースチップブイグーッショーン！ブイブレスアロー！」

「フォースチップブイグーッショーン！インフェルノゲート！」

「フォースチップブイグーッショーン！ハードロックダマシー！」

オブティマスプライモンの掛け声でそれぞれ攻撃を開始することになった。

「邪惡なる炎は我々正義が鎮火させる！ハードロックダマシー！」

「インフェルノゲート！」

「ブイブレスアロー！」

「フレアバスター！」

「アクセルアーム！」

オーバーロードモンは避けられなく、5つの攻撃を受け悲鳴を上げた。

オーバーロードモン消滅。

ダイアトラスモンとデジサイバトロン達は握手を交わした。

「私たちに出合えてうれしいよ。」

「いやいや、ダイアトラスモン。デジサイバトロンの中でもタフな奴とは噂されてたけど。本當だよ。」

「それほどでもないと思う。ハハハハハハ。」

みんなも仲良く笑つた。

一方、デジデストロン・・・

「あと六人、キングポセイドモン、ブレダキングモン、メナゾールモン、レッドティカスモン、ダイナザウラーモン、ブラックザラックモン。これはまずいですメガトロモン様。」

アンティイラモンがメガトロモンに報告した。

「分かつてゐる。インダラモン、アンティイラモンと一緒にデジサイ

バトロンを倒して」。」

「了解しましたメガトロモン様。」

サイクロナスマンは、少し不安を感じていた。

次回予告

「なんだか、いや予感が漂う場所ね。」

「インダラモンとアントニアーラモンじやないか。」

「お前達を排除するためにやつてきた。」

「やべえ、ここいつ強あがめるよ。」

「俺に任せろー！」

「次回第一十五話ジャックの本氣、ゴッジジンライモン登場ー。」

「行くぜ、プリテンダーソウルダブルエヴァリューションー。」

「これは、すばらしいことになつそうだ。」

## 第一十四話 破壊と呼ばれた正義、ダイアトラスマン見参！（後書き）

次回もまた見てね！

ピクシブにて歌詞ありバージョンの主題歌と挿入歌を用意しました。

## 第一一十五話 ジャックの本氣、パッシュジンライモン登場！

ダイアトラスマンが加わったデジサイバトロン。

デジテストロンの企みとは一体？

そして、今後の展開で明かされるデジタルワールドの新事実。

コンボモンと大次達は、グランドキャニオンのような場所に来ていた。

「すげえー、デジタルワールドにもこんな場所があるんだ。」

「田に焼き付けておきたい場所だぜ。」

「川も流れているわ。」

しかし、デジテストロンの罠がどうやら張り巡らされていることに、デジサイバトロン達は気がつかなかつた。

マグナスモンが、川の水を飲もうと瞬間・・・

「ヴィー・コンデジモンズだ。」

「デジテストロンの雑兵だぜー。」

「ブラーモン、マッハアラートモン。」

「よし、マッハグレンジャー！」

「春秋蹴光！」

ヴィーコンテジモンズは消滅した。

しかし、更に敵が現れた。

「アドームクハ！」

コンボモン達は、よけに避けた。

「彼等は、完全体デジモンだ。」

「俺達で、アンティラモン達を倒す。」

「待つてくれ。」

「ジャック、どうしたんだ。」

「どうもこれも麗の予感がしてならない。俺がアンティラモン達を倒す。」

「分かった。」

鬼束と古尾は、更にデジテス特朗の親玉が来ることを見た。

「まよい、メガトロモン達だ。」

「頼んだぞ、ジャック。」

「任せとけ大次。」

メガトロモン達の攻撃が始まろうとしていた。

「ENERON evolution」

「コンボモン進化、オプティマスプライモン！」

「マグナスモン進化、ゴッドマグナスモン！」

「ジエットモン進化、ジエットファイアモン！」

「バスターモン進化、ロードバスターモン！」

「スター・スクリームモン進化、ナイトスクリームモン！」

「power set evolution」

「バンクモン進化、レッドアラートモン！」

「ガーシェルモン進化、ガードシェルモン！」

「ソニックモン進化、ウイングセイバーモン！」

「ポップモン進化、ルーツモン！」

「プリテンダーソウルダブルエヴァオリューション！ゴッドジンライモン！」

メガトロモンは、ダブルフェイスモンとノイズメイズモンと共にい

た。

「究極体が5体、完全体が4体。」

「ガスケットモン、俺と融合しろー。」

「誰だ？」

一方、ゴッヂジンライモンは・・・

「くっ・・・」

インダラモンとアンティラモンを苦戦させていた。

「これで済むと思っているなよ。」

「どうこう意味だそれは。」

「ユニクロモンというお方が来たおかげでこっちは助かるのだよ。」

「ユニクロモン・・・まさか!」

「気がついたか。ならば話が早い。」

「お前等の話に付き合ひが必要はない。ゴッヂフレイングパンチ!」

アンティラモンとインダラモンは吹き飛ばされた。

「ぐわあああああー。」

「一体のデジモンは消滅した。

「ヨニクロモンってまさか！大次達が危ない！」

「メガトロモン、今日こそ決着をつけよう。」

「我等の新たな仲間を紹介しよう。ヨニクロモンだ。」

「ヨニクロモン？」

「我は、ヨニクロモン。選ばれし子供たちに対する復讐者である。」

突如現れたヨニクロモン。彼が言った選ばれし子供たちに対する復讐者とは一体どういったことなのか？

次回予告

「我は、ヨニクロモン。選ばれし子供たちに対する復讐者なり。」

「ここのつの言つていることがわからねえ。」

「選ばれし子供たちの伝説のことと知つていることがある。」

「ブラーーモン教えてくれ。」

「次回、第一二十六話ヨニクロモンの正体。」

「あいつは滅んだはずじゃ。」

「いや、おれがここに立つてはだめだ」

第一十五話 ジャックの本気、ゴッドジンライモン登場ー（後書き）

次回もまた見てね！

## 第一一十六話 ユニクロモンの正体

「我は、選ばれし子供たちへの復讐者なり。」

「あいつがユニクロモン。」

「大次、とてもなく嫌な感覚を持つているぞ。」

「ああ、そのようだ。」

ユニクロモンは、本体の姿で現れた。

「強大な選ばれた力を消してやる。デジタルトランスマフォーム！」

オブティマスプライモン達は、攻撃態勢に入った。

「奴等」「よせつ、スノースチームモン。ユニクロモンの強さを見  
れば安全だ。」

「メガトロモン様の言うとおりだぜ。」

「ガスケットモン達は、それでいいのか。」

「俺達は高みの見物。」「そつそつ、見物。見物。」

スノースチームモンは、嫌な予感しかしていなかった。

「マトリクスキャノン！」

「ゴッドスナールドット！」

「ロードキングファイアー！」

「ファイティングロー／ミサイル！」

「ヴァーテックスキャノン／プロトン！」

戦車に変形したユニクロモンの体から鎖のよつた触角が現れた。

その先端から手を広げたようなものが現れた。

「攻撃を謎の物体で打ち消しただと…」

「なに？！」

デジサイバトロン達は驚愕した。

「まさか、滅んだはずでは。」

「ブラー／モン、どうしたんだ？」

古尾が聞いた。

「彼の正体を知っている。」

「奴の正体？」

「ユニクロモンの正体は、アポカリモンの可能性がある。」

「アポカリモン?」

「かつて、君たちと同じ選ばれし子供たちが戦つた最悪の敵。人間の負の感情や、進化の過程で消えて言つたデジモン達の怨念が集結した存在。滅んだと聞いたはずなのだが・・・」

「デジタルトランスフォーム!」

ユニクロモンの右手にオールスパークの欠片があつた。

「私は、これにデータが触れたことにより転生した。私は本体、しかし別箇がある。それはデジタルワールドにあるものをすべて食いつくすために再び存在できた。」

ユニクロモンは、オールスパークの欠片を手で握り潰して食べた。

「ふつ、オールスパークのおかげで我的体から、全く違う素質のデジモンが作り出せる。」

「こいつー！」

「よせっ！ダイアトラスマン！」

「ゾーンブレードカッタービクトリー！」

ユニクロモンは、触角で攻撃を受け止めた。

「そんな程度か。」

「何だと！」

「喰らえ！ オールサンダーディドリー フューチャー！」

『デジサイバトロン達はみんな、雷の攻撃を受けて倒れた。

「くつ・・・」

「こいつ・・・」

スタースクリームモンは、立とうとしても阿連種が言った。

「無茶をしな・・いで。」

「し・・かし。」

メガトロモンは部下たちに命令を下した。

「デジサイバトロン達を拘束せよ。」

「くつ・・・そりはさせないわ。」

「俺だつて・・・もつと進化させたい。」

「そりだ・・・こいひるんでは。」

古尾と郎利と羽渡の『デジヴァイス』が勝手に動き出して、エネルゴンカードを作り出した。

3人がエネルゴンカードを差し込んだ。

## 「ENERGON EVOLUTION」

「ガーシュエルモン進化、ガードハイドモン！」

「ソニックモン進化、ソニックボンバーモン！」

「ポップモン進化、ベクタープライモン！」

ガードハイドモン 究極体 必殺技「グランドトゥバースト」

ソニックボンバーモン 究極体 必殺技「ソニックブレード」

ベクタープライモン 究極体 必殺技「時空大剣時停止破」

「なに、究極に進化しただと！」

ユニークロモンが焦りを見せ始めた。

「ユニークロモン、ただのはつたりだ！」

「カオスフライズキヤノン！」

「グランドトゥバースト！」

「ソニックブレード！」

一つの攻撃がユニークロモンを吹き飛ばした。

メガトロモンは攻撃しようとするが・・・

「時空大剣時停止破！」

ベクター・プライモンによつて時が止まつた。

「時空大剣神威乃舞！」

メガトロモンを攻撃を受けて、左腕の半分がデータ消失しかけいつた。

「デジテストロン、引き上げるぞー！」

デジサイバトロン達は、安全なところに避難した。

「大次、良かつた。」

「コンボモン、3体の究極体に助けてもらつたんだ。」

「郎利さん達も究極体に。」

「そうよ。私達だつて進化できると信じれば出来るのよ。」

カルロスは、驚いた。

「これつて、エネルゴンカード。」

「きっと、俺も進化できるよ。」

「そうだな、バンクモン。」

一方デジテストロンは・・・

「生き残った將軍を全員呼び出して一気に攻撃する。」

「メガトロモン様、そんなことしたら・・・」

「捨て身の作戦だ。」

サイクロナスマントとメガザラックモンは、厄介だと思つていた。

次回予告

「デジモントランスマフォーマーズシーズン3突入！」

「いよいよ、戦いも後半戦だな。」

「いや、中盤戦だよ。」

「これからが進化だな。」

「デジサイバトロン軍最高ー！」「最高ー！」

「てか次回予告きちんとしてないよね。」

「次回第二十七話熱くなれ『デジサイバトロン軍』。將軍全員を蹴散らせー！」

「バンクモン進化、シグナルライザーモンー！」

「これはすげーことになりそうだ。」

第一十六話 ニニクロモンの正体（後書き）

次回もまた見てね！

## 第一一十七話 熱くなれデジサイバトロン軍、將軍全員を蹴散らせ！

メガトロモンが、怒りを爆発させてこう言った。

「残った將軍ども、一気にデジサイバトロンを討て！」

「了解！メガトロモン様！」

ブラックザラックモンとレッドティカスモンは、參謀として作戦を立てた。

一方、デジサイバトロンは・・・

「コンボモン、デジデストロン軍の奴らが来たよ。」

「大次、サンキュー。俺達の考えはこうだ。大次と江利彦と左利と鬼束で、敵軍をかく乱させて、そのあとを、残りの6人がやって、逃した奴をほかのみんながやるという作戦。そして今回ばかりは、將軍が強いかもしねない。」

ソニックモンは少し心配していた。

「本当に行けるのか？」

「大丈夫よ。ソニックモン、私達だつて究極体に進化できるよつこなつたんだから。」

「カルロスも行けるか。」

「うん、ハチャメチャに闘志が燃えているからな。なあバンクモン。」

「

「ああ、カルロスの言つとおりだよ。」

デジデストロンの将軍がやつてきた。

「げつ・・・6人の将軍が来た。」

「なにつ！」

キングポセイドモン 究極体 必殺技「フォールデスレイン」

ブレダキングモン 究極体 必殺技「ファイアーヘル」

メナゾールモン 究極体 必殺技「グランドデストラクション」

レッドティカスモン 究極体 必殺技「ファイブカノン」

ダイナザウラーモン 究極体 必殺技「テラーオブアタックバースト」

ブラックザラックモン 究極体 必殺技「ミステリアスブラック」

「全部、究極体！」

「きつととてもなく強いかもな。長期戦になるかもしれない大次。」

「

「ああ。」

「でも、デジサイバトロンの底力をデジテストロンに見せつけるときじゃないの？」

「阿連種の言つとおりだぜ！大次。長期戦なうが関係ねえ！」

「チームデジサイバトロン…ござ出陣…」「おう…」

「ENERGON EVOLUTION」

「コンボモン進化、オプティマスプライモン…」

「マグナスモン進化、ゴッドマグナスモン…」

「ジョットモン進化、ジョットファイアモン…」

「バスターモン進化、ロードキングモン…」

「バンクモン進化、シグナルライザーモン…」

「ガーシュルモン進化、ガードハイドモン…」

「ソニックモン進化、ソニックボンバモン…」

「ポップモン進化、ベクタープライモン…」

「スタースクリームモン進化、ナイトスクリームモン…」

「プリティンダーダブルエヴォリューション…ゴッドジンライモン…」

「デジサイバトロンのアタック開始だ。マトリクスキャノン！」

「ゴッドハリケーンフルバースト！」

「ファイアーズブレイク！」

「ゴングロッキンファイアー！」

「シグナルブランドフォース！」

「ホライズンキャノン！」

「ソニックカイバーストミサイル！」

「時空大剣神威乃舞！」

「ヴァーテックスキャノンイプシロン！」

「イジェクトファイナルメテオ！」

「フライトバスター！」

「マッシュスピング！」

「トルスマイルー！」

「マキシマスマニアインパクト！」

10個の必殺技のほかに、デジサイバトロン達も加勢した。

「ゾーンカイザーキリイング！」

6人の將軍達は、攻撃をもろ受けた。

「こいつ等、殺れ我が部下共！」

しかし、すべて全滅していた。

「あの攻撃で、部下が全滅だと。」

「これがデジサイバトロン魂だーー！」

一旦優勢に思えたデジサイバトロン軍だが・・・

「ミステリアスブラック！」

「前が見えなくなつた。」

「こ」の暗闇は、まさか・・・

「俺の攻撃で滅べーダークデスインー！」

「ぎゃやああああー！」

「オブティマスプライモン達が・・・

「こ」のままでは・・・

大次は、エネルゴンカードをもつ一枚作つた。

「まさか、更に進化を。」

「やうするしか」の危機は、救えないだろー。」

「確かに、そうだな。」

「行くぞ、Hネルゴンカード差し込み完了。」

「SUPER ENERGON EVOLUTION」

「オプティマスプライモンモードチョンジ！ オプティマスプライモンスーパー モード！」

「プライムスプライト！」

「なにつ、俺の攻撃をはじいただと。」

「ブラックザラックモン覚悟しろ！ オプティマスクロー！」

ブラックザラックモンの胸部にオプティマスプライモンスーパー モードの爪が貫通した。

「何だと、無念。」

ブラックザラックモン消滅！

次回予告

「スーパー モードかつけええ！」

「6人の将軍なんて一気に倒せそうだ。」

「その前に現れた謎の球体デジモン軍団。」

「あいつらはいったい何者なんだ?」

「次回第二十八話正体不明の球体デジモン襲来、5体の合体勇者デジモン参上!」

「待たせたな。我が名はスペリオモン。」

「これはすごいことになりそうだ。」

第一十七話 熱くなれデジサイバトロン軍、將軍全員を蹴散らせ！（後書き）

次回もまた見てね！

## 第一十八話 正体不明の球体デジモン襲来、5体の合体勇者デジモン参上！

ダイナザウラーモンとメナゾールモン、ブレダキングモンはゴッドマグナスモンらを尾行していた。

江利彦の作戦が的中していたようだ。

「よし、ジョットファイアモンのフォーメーションで行くぞ。」

「了解！」

ロードキングモンとゴッドマグナスモンは、ジョットファイアモンの後ろにいた。

「作戦通りに行けるな。」

「来たぞ。」

「よしつ、攻撃開始！」

「ジェッブ拉斯ターバースト！」

「クロリングバレリケーン！」

「ロードキングプレス！」

ダイナザウラーモンとメナゾールモンとブレダキングモンは攻撃を受けて消滅した。

残すはレッドティカスモンとキングポセイドモンだけとなつた。

「！」のままではやられる。」

「オブリマスプライモンスーパー モード、いい物くれてやれ！」

「大次、分かつた。シータキヤノンフルバースト！」

レッドティカスモンにその攻撃が喰らつて消滅した。

「まずい、早く逃げなくてはやられる。」

キングポセイドモンは、必死に逃げたが謎の球体デジモンに出会つた。

「なんだ？」

「デジタルトランスフォーム！バグモン！」

バグモン、丸いボールのような形状に変形するトランスフォーマー型のデジモン。必殺技は、胸のキヤノン砲から放つ「リンクチビームデス」

「小さい者たちよ。此処を通せ！」

「誰でもいい。混沌になるものを吸収する。そこのお前が吸収に役立つ。ノイズメイズモン。」

「呼ばれて飛び出で、ジャジャーン！」

ノイズメイズモンは、見たことも無い紋章を見せた。

「貴様裏切るつもりか。」

「俺は、元から貴様等の部下じゃないんでね。」

「なに? ほむけ、裏切り者はすぐに殺す。フォールテスライン!」

バグモンが、ノイズメイズモンをかばって4割が消滅した。

「何だと!」

「やつ言ひ」と、俺たちつながっているのだよ。サーチミニサイルオーラビクトリー!

キングポセイドモンを追尾する//サイルが放たれた。

「たつた、6発か。」

しかし、バグモン達もその攻撃をした。

「げつ、まよい・・・ぎやあああああ!」

キングポセイドモン消滅。

「ユニクロモン様に献上するにふさわしい妬みと恨みが込められて  
いる。素晴らしい。傑作だ! アカデミー賞級だ!」

ノイズメイズモンはバグモン達と一緒にどこかへと去った。

それを見ていたのは5体のデジモンであった。

「やはり、アポカリモンのデータが読み取れた。」

「「」の事をデジサイバトロンのみんなにも。」

「もうだな。早く報告しなことまぢい。」

デジサイバトロン達はデジテストロンの基地を探すために休むことなく探し続けた。

そこには10体のデジモンがいた。

「デジテストロンなら此処にいるぜ。ファイブジョグレス、ブルーモン！」

「もうこりこりと。ファイブジョグレス、ブルーティカスモン！」

デジサイバトロンに次なる危機が迫っていた。

そして、ユニクロモンの目的はいったい何なのか？

次回予告

「スペリオモンって何なの？」

「私の名前だ。」

「今回、その5体が登場したよ。」

「そりゃうことだ。ファイブジョグレス！」

「次回第二十九話、ブルーティカスモン vs スペリオモン。」

「これは、すゞいことになりそうだ。」

## 第一十八話 正体不明の球体デジモン襲来、5体の合体勇者デジモン参上！（後）

次回もまた見てね。

## 第一十九話 ブルーティカスモンvsスペリオモン

デジサイバトロンは、ブルーティカスモンとビルドロモンとにらみ合いをしていた。

「！」のままでは、にらみ合いが続いてデジテストロンの行動を阻止できない。」

大次は、オプティマスプライモンスーパー・モードに指示を送った。  
「分かった大次。危険すぎるがやつてみる。」

オプティマスプライモンスーパー・モードはマッハアラートモンと一緒に瞬間移動して、ビルドロモン達の後ろに回った。

「オプティマスクロー！」

「マッハランドキャノン！」

ビルドロモンとブルーティカスモンに攻撃が命中したのだが・・・

「分離しやがった！」

「ゴッドマグナスマン、一体でも取り押さえで。」

「分かつた左利！一体でも多く取り押さえれば。」

しかし、デジテストロンの一人、ショックウェーブモンに妨害を受けた。

「貴様、邪魔をするつもりか。」

「邪魔は、お前だデジサイバトロン!」

ガスケットモンやランドバレットモンまで出撃してきた。

「次から次へと。」

ロードストームモンとノイズメイズモンとメガトロモンが、デジサイバトロンに集中攻撃を仕掛けってきた。

「これでダチがあかない。」

その時、炎に輝くスポーツカーがやつてきた。

「デジサイバトロンのみんな、これを使え!」

「ファイブジョグレス装置。」

「ファイブジョグレス!」

「スペリオモン!」

5機の戦闘機が同時にやつてきて、デジストロンをかく乱させた。

スペリオモン 究極体 合成型 必殺技「マキシマムトライアント

「ホットロティマスモン、デジタルトランスマーフォーム!」

ホットローディマスモン 完全体 トランスマスター型 必殺技  
ショットフレーム」

ビルドロモンとブルーティカスモンは、スペリオモンを見ていた。

「一番厄介なのが、デジサイバtronに入りやがった。」

メガトロモンは、ブレードでオティマスプライモンスーパー モードに攻撃を仕掛けていた。

「究極体が戸惑つていては弱いな。」

「それはどうかな。シータキヤノンフルバースト！」

メガトロモンが吹き飛ばされた。  
ビルドロモンはスペリオモンに襲いかかった。

「マキシマムトライデント！」

「なに…ぎゃあああ！」

ブルーティカスモンがビルドロモンの代わりになつた。

「これでも食らえ、ブローガスグランドデス！」

「スペリオルフレーイード！」

「一つの攻撃は相殺して衝撃波が伝わつた。

メガトロモンは、勝負がつかないということを言い始め退却を宣言

した。

ショックウェーブモンは、逆らってデジサイバロンに攻撃を仕掛けた。

「ショックウェーブモンやねー。」

「ナイトスクリームモン、裏切りは許さん！」

# 「ナルビームヘルバースト！」

ショックウェーブモンに命中し、両腕が消滅した。

「ぎやああああああああああああああ！メガトロモン様助けてくれ！」

仕方ない。お前を想いで退却する

アーヴィングエレジーが中心となつた。

「この仇は絶対に返してやる！」

テジサイハトロンは新たに仲間が増えて喜ぶ大次第

单いの疲れを癒しは行く場所を探しは行こうよ

良木は片方の方を触ってました

確かに、疲れを取る場所を探さなきやね。」「

ホットローディマスモンは疲れを癒す場所があることを知っていた。

「」の近くにピノックモンが運営している温泉があるんだ。ピノックモンは俺の親友だし彼から聞きたいたら、デジデストロンにはばれることのないシールドを張っているらしい。ハグルモン達が、おもてなしをしてくれるだ。」

その温泉に全員が向かった。しかし、球体デジモン「バグモン」がその一部始終を聞きとっていた。

一方デジデストロンでは・・・

「シヨックウーブモンが・・・」

「謎の黒い塊になつた！」

「どうこり」とだ。これは・・・」

「転生進化ではないかと思いますメガトロモン様。」

「ノイズメイズモン。なんだその転生進化って。」

「転生進化は、アポカリモン様がユニクロモン様に転生したと同時に進化もするという複雑なプログラム。過去の記憶は一部消えてしまうが、そこに所属していたことは忘れていないので安心を。」

次回予告

「温泉だー！」

「じばらくは平和で楽しめる。」

「デジデストロンでは、ショックウェーブモンが転生進化を。」

「俺の名は、ショックフリートモン！俺にかかるればデジサイバトロンなんて皆殺しにしてくれる。」

「次回、第三十話バグモンの罠…ピノッキモン最後の決断。」

「今まで、俺の親友にいてくれてありがとなホットローディマスモン。」

「

「これはす”ことになりそうだ。」

第一十九話 ブルーティカスモンVSスペリオモン（後書き）

次回もまた見てね。

### 第三十話 バグモンの罠—ピノッキモン最後の決断

ショックウェーブモンの声が変わり始めた。

「うわああああああ！」

「本当に転生進化なのかよ。消滅とかしたらまずいぜ。」

ガスケットモンとラングバレットモンは心配していた。

「...」  
— 三  
—

シミックウェーブモンを覆っている黒い塊が消えて姿を現したのは・

「ショックフリートモン！」

ショックフリー・トモン　トランسفォーマー型　究極体　必殺技「ショックエアクエイク」

一方、デジサイバトロンは・・・・・

郎利達が目を輝かしていた。

「此処が、俺のと親友ピノッキモンが運営している温泉だ。」

「大次、入ろうよ。」

「そうだなコンボモン。」

温泉に入っている古尾と大次は、あることに気がついた。

「デジテストロンが入らなくて、ゆっくりとしていられる。」

「ホントだぜ、なあコンボモン。」

「ああ、大次の言つとおりだよ。」

ガーシュエルモンは、古尾に話しかけた。

「古尾、ハグルモン達がバグモンに狙われていないか。」

「大丈夫だよ。バグモンってこの前の丸い球体。」

「そう、成熟期のデジモンでもあった。」

「ハグルモンは、成長期つてこれはまずい。」

ハグルモン達は、バグモンに出会った。

「誰だ、お前は。」

「デスグリット！」

ハグルモン達が消滅した。

ショックフリートモンがバグモン達と一緒に温泉の場所に来た。

デジサイバトロン達は、温泉から出て広場でくつろいでいた。

ピノックキモンがホットロ<sup>テ</sup>ティマスモンに報告をしに来た。

「大変だ。デジテストロンが攻めてきた。」

「なにつ、ハグルモンは。」

「全滅だ。こうなれば俺が行く。」

「までつー。」

「今まで俺の親友にいてくれてありがとなホットロ<sup>テ</sup>ティマスモン。」

ピノックキモンは、ショックフロートモンと出合つた。

「貴様、絶対に許さん。」

「俺を倒そうなど、100年早いー。」

「何ー。」

「ショックエアクエイク！』

ピノックキモンに命中したがなおもたちあがつた。

「此処でくたばるわけにはいかないー。ブリットハンマーー！」

ショックフリートモンは、攻撃を避けたあと必殺技を繰り出した。

「ショックエアクエイク！』

ピノッキモンは攻撃を受けて死にかけていた。

### 次回予告

「ピノッキモンが、死んだ。」

「ゴッドマグナスマンスーパー・モード・ピノッキモンの仇を取つて！」

「左利、任してくれ！」

「次回第三十一話スーパー・モード発動！退かせぬゴッドマグナスマン。」

「素晴らしい負の感情だ。」

「これはすまることになりそうだ。」

第三十話 バグモンの懲一・ピノッキモモン最後の決断（後書き）

次回もまた見てね！

## 第三十一話 スーパーモード発動！退かせぬゴジギマグナスモン

「ピノッキモン…ああ…」

死にかけているピノッキモンを見て、ショックフリーントモンは嘲笑つていた。

「所詮、トランスマスター型デジモンに勝てるはずがない。消滅しろペベット型が！」

「なん・・だと・・究極・・体同士が・・戦つても・・・」

「シロッキサウンドトライミックス！」

「ENEGON evolution.0.0」

「マグナスモン進化、ゴッドマグナスモン！」

「お前・・」

「あまりしゃべるな。ゴッドティアストーム！」

「一つの技が相殺した。

「こやつ、究極体にしては強いだがショックウェーブモンの時とあまり変わっていない。」

ショックフリーントモンは素早い動きでゴッドマグナスモンを翻弄した。

「ぐつ・・・小さくなつた分、早くなつたな。」

「当然だ。お前等の攻撃を避け損ねて死にかけたが転生進化したおかげでこんな姿になつた。」

「もつ一度食らわしてやる。大次！」

「ああー。」

「ENEGON evolution」

「コンボモン進化、オプティマスプライモンー。」

「SUPER ENEGON evolution」

「オプティマスプライモンスーパー モードー。」

「シータキャノンフルバーストー。」

「ふんつー。」

「なにつー。」

「ショックエアクエイクー！」

オプティマスプライモンに命中した。

「もはや・・・」までもだ・・・ショックフリー・トモン・ログネット  
「ブلاスターー！」

ピノックキモンの最後の攻撃がショックフリートモンの左肩に傷を付けた。

「がはつー。」

デジサイバトロンは衝撃の光景を見て固まつた。

ピノックキモンをショックフリートモンの右腕が貫通していたのである。

「チョックメイトだな。」

ピノックキモン消滅。

左利は、一枚のエネルゴンカードを持っていた。

「この場で、罪のないデジモンが消されるのはもつこやだー。」「シドマグナスマン蹴散らしましょー。」

「左利の強い気持ちが、俺にもわかる。」

「行くよー。」

「SUPER ENEGON EVOLUTON」

「ゴッドマグナスマンスーパーモード 究極体 トランسفォーマー

型 必殺技「スパイラルシーウォックス」

「モードチーンジしたところでの速度についてこれるか。」

ショックフリートモンのスピードが速すぎる。

「どうしよう動きが早すぎる。」

「左利、大丈夫だ俺に任して。行くぞーはつー！」

ゴッドマグナスモンスーパー モードはショックフリートモンを捕まえた。

「放せー。」

「スペイナルシーウォックス！」

「ああやややああああー！」

ショックフリートモンは、左足の一部と胸の一部の塗装がはがれて、天高く打ち上げられた。

「ピノッキモン、俺はどうすれば・・・」

「ロティマスコンボモン、良かつたらトジサイバトロンの仲間に入らないかい。」

「しかし・・・」

「俺達だって、ピノッキモンをこの場で失ったところは悲しい。でもな此処で涙を見せてくる場合じゃない。デジテストロンはデジタ

ルワールドの完全支配を企んでいる。しかもユニクロモンまで復活している。あまり時間は残されていないんだ。俺達デジサイバトロンは、デジタルワールドの危機を守るためにチームとして組んだ。ローディマスコンボモンの戦力が加わればデジテストロンを蹴散らすスピードが速くなる。」

「そうだな。俺もこのままでは友達となつたデジモン達が危ないと思つてゐる。よしつ、俺もデジサイバトロンだ。」

ローディマスコンボモンの胸にデジサイバトロンのエンブレムがついた。

一方、ノイズメイズモンは・・・

「先ほどシヨックフリートモンが殺つたピノッキモンの負の感情を持つつてしまひましたユニクロモン様。」

「おお、これは美味。シヨックフリートモンを倒せない気持ちは格別だな。ハハハハハハハハハ！」

ユニクロモンはいつたい何者なのか・・・

次回予告

「ロードキングモン、少しばかりはわかつてくれよ。」

「でもな鬼束・・・」

「近くにいるのはデジストロンじゃないか。」

「サウンドウロー ブモンと倒したはずの九大魔将軍。」

「次回、第三十一話復活した10人の『テジテストロン』。」

「これはすゝ」とになりそうだ。」

第三十一話 スーパーモード発動！退かせろゴッドマグナスモン（後書き）

次回もまた見てね

## 第三十一話 復活した10人のデジテストロン

「デジサイバトロン一行は、肌寒いところに来ていた。

ジャックは、あるものを見た。

「あの角は一体・・・」

「まさか、ユニクロモン。」

「あたりだ。デジサイバトロンの諸君。ただし褒美はない。」

「てめえーを倒すという褒美がある。」

「ハハハ。我等を倒すだと。冗談が良くて好きになつたぞ。少しだけ話し合いをしたいんだ。」

大次は、ユニクロモンの要望にこたえた。

「良いだろう。なんだ話というのは。」

「デジデストロンにはルーチェモンというデジモンがいる。お前達は知らないか。かつてデジタルワールドを破滅寸前にまで導いた魔王の「」ときデジモン。そんなデジモンがメガトロモンの使いになつているって不思議に思わないか。」

「確かに、ルーチェモンってそんなに厄介な奴なのか。」

「ああ、七大魔王の一人でとてつもなくパワーがある。七大魔王が

全員デジデストロンに入つてなくてよかつたな。七大魔王の中には選ばれし子供たちの味方になつたりする者もいた。またある者は、実験台にされ人間と合体して人間界を暴れ回つた奴もいる。この我等にも七大魔王に太刀打ちは手こずる。」

「なるほど。」

デジサイバトロンは歩きながら喋つていた。

「ユニクロモンって意外といい奴だつたりして。」

「まあ、案外悪そうな奴じやないみたいだし。」

「まるでスパイみたいなやつだつたりして。」

「でも、デジデストロンと手を組んでいる。油断はできないし未知数の力を持っている。」

一方、ユニクロモンは・・・

「九大魔将軍、サウンドウェーブモン、リボーンリロードー！」

復活の魔法陣が描き出され、そこから九大魔将軍とサウンドウェーブモンが現れた。

「ユニクロモン様！」

「どうしたノイズメイズモン。騒がしいぞ。」

「申し訳ございません。メガトロモンの計画会議に出席してくれと

報告があつました。」

「断ると云ってくれ。」

「しかし・・・」

「いいか、我等を何奴だと思っているんだあのメガトロモンは。我等はアポカリモンが転生した姿。つまりユニクロモンなりだぞ！」

ノイズメイズモンは、デジデストロンからユニクロロンの紋章に切り替えた。

「そうですね。我々はデジテストロンの言いなつこはない。」

しかし、それを見ていたアイアントレッドモンがいた。

「これはスクープだ。」

デジサイバトロンは・・・

都會のような場所で休憩を取っていた。

「すげえー、レース場まであるぜー。」

「一回、走りうか。」

「良いゼー。デジタルトランスフォーム！」

コンボモンとマグナスモンとマッハアラートモンがレースロードではしゃいでいた。

「疲れを見せねえーなあいつら。」

「やつね。やつぱり血氣がよすぎるとが原因のかしら。」

「一位は、この俺だぜ！」

「一位は疲れない！」

大次と左利は、これほどではないはしゃぎに少し呆れていた。

郎利は、ソニックモンと一緒に空を散策していた。

「やつぱり、空に飛んでいた方が一番。そつでしょソニックモン。」

「もちろんだよ。しかし、レース場ではしゃいでいる奴らも楽しそうだな。正直羨ましいぜ。」

「車に変形できなければ、でも飛行機系に変形できるのも得だと思つ。」

「それもやうだな。」

一方デジテスロコンは・・・

「ゴークロモンの奴、裏切つよつただと。」

「それに奴等はエンブレムを自由に変えます。」

「どうしてそんなことに気付かなかつたんだ。」

「ユニクロモンの状態は？」

「メガザラックモンそれがデジサイバトロンのエンプレムになつて  
いました。」

「なんだと。」

「九大魔将軍も復活しています。サウンドウェーブモンも、おそらくユニクロモンの配下になつちゃったかも。」

「これは一大事だ。最強のシナリオを作りデジサイバトロンとユニ  
クロモンを一斉にたたきつぶす。」

「面白い、やつてみる！」

「誰だ！」

「我的名は、アルゴルスモン。」

アルゴルスモン 魔人型 究極体 必殺技「ブルーエラー＝ミッショ  
ン」

デジテストロンのエンプレムになつている。

しかし突如としてデジサイバトロンに切り替わった。

「お前等を蹴散らしに来た。覚悟しろデジテストロン！」

九大魔将軍の一人、オボミナスモンも参加しに来た。

「」のままでは・・・

メガトロモンは、フォースチップを見ていた。

「よし、これを使う。」

「フォースチップハイギフトオブダークネス！」

次回予告

「ユニクロモンのバグモン集団が来た。」

「九大魔将軍の一人、ダイナザウラーモンだ！」

「此処はジェットモンの出番だな。」

「ああ、俺達の力を見せる時だ。」

「次回第三十二話稲妻走る！ジェットファイアモンスーパー モード！」

「此処で一気に決めてやる。」

「これはす」「ことになりそうだ。」

第三十一話 復活した10人のデジテスロン（後書き）

次回もまた見てね。

## 第三十二話 稲妻走る—ジェットファイアモンスター モード

ギフトオブダークネスを食らつたアルゴルスモン。

「ふふ、そんな技効かない！」

「アルゴルスモン、これならどうだ。ダークバーストシェルター！」

この攻撃はオボミナスモンが食い止めた。

「メガトロモン様、彼等デジサイバトロンです。」

「なにつ、裏切つたかオボミナスモン。」

オボミナスモンは、デジサイバトロンとデジテストロンに切り替え  
た。

「何を言つてゐるんですかメガトロモン様。アルゴルスモン人質役  
を頼む。」

「分かつた。デジサイバトロンのアルゴルスモンだ。」

「捕虜を捕まえたのか。オボミナスモンとあと復活おめでとつ。」

メガトロモンはスノーストームモンとアイアントレッジモンからそ  
のことを聞かされているが逆に利用しようと考えているようだ。

アルゴルスモンとオボミナスモンは、ニヤリとしていた。

一方、デジサイバトロンは・・・

都会の町を満喫していた。

「大次、もう少しいようぜ。」

「デジテストロンの気配を感じる。」

突然、江利彦がデジテストロンの気配に気がつきはじめた。

「デジテストロン。」

「行つてみよう。」

「君達は満喫してくれ。俺はジェットモンと一緒に行く。」

「分かった。」

デジテストロンの気配が分かった。

「ダイナザウラーモン。」

ジェットモンはバグモンを見ていた。

「江利彦、進化させてくれ。」「よしつー！」

「ENERGON EVOLUTION」

「ジェットモン進化、ジェットファイアモンー！」

ダイナザウラーモンは、ジエットファイアモンを見ていた。

「ダイナソー キャノンテラーセットー！」

「サンマインドレーザー！」

「一つの技は相殺したが・・・」

「ミリブレイクビーム！」

バグモン達の攻撃をジエットファイアモンが食らった。

「くつ、身動きが取れない。」

「今だ。ファイナリストティラノブラスターー！」

「ぬわああ！」

「ジエットファイアモンーかくなるつえは・・・」

デジヴァイスアトラントディスにもう一枚のエネルゴンカードをさし込んだ江利彦。

「SUPER ENERGYON EVOLUTION」

「ジエットファイアモンスーパー モード！」

「スーパー モード、それがどうした！バグモンたちよやれー！」

「行くぞー、ミリブレイクビームー！」

ジエットファイアモンスター モードはその攻撃を見事にかいぐくつた。

「サンダーロードスパークメテオ！」

バグモン達は悲鳴を上げて消滅した。

ダイナザウラー モンが次の一手に踏み切らうとしたが、ジエットファイアモンスター モードに上空高く舞いあげられた。

「お前、放せ！」

「サンダーロードインパクトバースト！」

一気に地上に落下して大爆発した。

ダイナザウラー モン消滅。

江利彦とジエットファイアモンスター モードはビクトリー ポーズを付けていた。

次回予告

「ロードキングモン、行くぞ！」

「自分は、ブレイクドラモンを倒したい。」

「しかし奴は危険なデジモンだぞ。」

「分かつていいから」戦えるのです。」

「次回第三十四話最強の馬力のスーパー・モード。」

「これはす、」ことになりそうだ。」

第三十三話 稲妻走る—ジエットファイアモンスター モード（後書き）

次回もまた見てね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6470n/>

---

デジモントランスフォーマーズ

2011年11月17日21時24分発行